
友情の刹那

wokagura

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

友情の刹那

【Zコード】

Z9922V

【作者名】

wokagoura

【あらすじ】

もうすぐ大学のセンター試験。猛勉強する駿河聖奈。絶対に合格しなければならない。それにはもう一つの理由があった。
友情の刹那、どうして異性との関係は変わってしまうのだろう。ずっと友達でいるはずだったのに何故か不思議な感情が湧き出てしまう。そんな高校生たちの切ない想いを描いた物語。

第1話 切っ掛け

妹の部屋のドアに手を掛けた

「ぐおおおー・・・・・」

とこいつめき声が聞こえた。逞真は不思議に思いドアを開けた。
そこには妹・聖奈の背中があつた。

「何とこいつ顔を出してくるんだ、お前は。」

軽く頭を叩くとピクッと振り向いた。

「うわー、なんだ兄ちゃんか。バカになるから頭叩かないで。」

「もともと馬鹿だろー。」

「これ以上バカになりたくないの一受かんなかつたらシャレにならないよ。」

「そうか、そろそろセンター試験だもんな。」

「そうなの。」

逞真は机のテキストを覗きこんだ。

「どこのどの教科をやつてこるんだ?」

「数学。」

逞真はじつと解答欄を見て、一やつと笑った。

「そこ、答えが違う。」

「・・・・・マイティ?」

「ケアレスミスだ。見落とすな。」

「あ、ホントだ。流石数学教師。早いねえ！」

小治の御用

「お前、大丈夫か？受かる自信ある？」

聖奈はガツツポーズして逞真に振り向いた。

「安心せーー！それに、どうしても大学に受かんなきゃいけんしね。
じゃないとアーヴィングに会えないし。」

選真はふと思ひ出したよつて言つた。

「アイツ・・・本当に聖奈の所に戻つてくるだろうか？」
「大丈夫、そういうの絶対守るやつだからね。来ないなら逆にこいつ
ちが行つてやるよ。」

「そうか。」

「元気かな、節ちゃん。」

「うたく、急に思い出しちしました。」

逞真は今度は妹の頭を撫でて部屋を後にした。

自室に戻ると、ベッドに寝転がつた。

「本当、らしくない。聖奈が、将来の約束をするなんてな。
いや、そう思い込んでいるだけか。」

運真さん過去について思い出した。

第1話 切っ掛け（後書き）

初め・・・短くてスマスマセーン！！
いや、次から長くするつもりなんで、宜しくお願いします

第2話 津田 節

約一年半前、聖奈が高校2年生の夏休みのことだった。遙真も部活がなく、家でパソコンに向かっていた。

その時、不意にインター ホンが鳴った。

「はー。」

と、言つた瞬間に遙真は凍りついた。さつきまでの暑さが一瞬でやがて

『・・・北高校のもの、ですか・・・』

無愛想な声。遙真は一瞬にして反感を持った。

「少々お待ちください。」

そう言つて捨てて受話器を置き、玄関の扉を開けた。

「・・・・・」

眉根を寄せたその男を見る。

髪は黒いはずなのに所々金色に染まっている。Yシャツは第・・・

3、4ボタンまで外れているしネクタイはぼぐれている。中のTシャツは見せるためのもののように派手な色合いでいた。よく見ると耳にはイヤリング。Yシャツの裾は中途半端にズボンから出でていて手首にはアクセサリーと思わしきリストバンド。その手には聖奈のスクールバッグがあった。しかし、顔はモデルになれるんじゃないかと思うくらいイケてて、細身な体格をしていた。

逞真の前に姿を現したのは、見た目からしてモロ不良でいかにも態度の悪そうな男子高校生だった。

「・・・聖奈はいますか。忘れ物を届けに来ました。」

いきなりの呼び捨て。まずはどんな関係なのかと逞真は訊きたかった。

「聖奈は留守だ。今学校にいる。」

男子高校生は呆れた顔をして

「なんだよ、まだ帰つてきてねえのかよ。アイツ、どんだけ遊んでんだよ。」

と呟いた。ますますこの男について知りたくなる。

「忘れ物を届けに来てくれたんだってな。それなら預か――
「アレ? ? 節ちゃん! ?」

元気のいい声がする。

「聖奈・・・」

息ぴったりで睨み合つ一人。そこには聖奈がいた。

「節ちゃん、どしたん?? なんでウチんち知つてんの!?」

「美和に聞いたんだよ。それよりお前、これ忘れてつただろ、俺ん家に。」

「あつ、そーだつた! 今日訊こつと思つたんだけど今日に限つて節ちゃん学校に来てくれないんだもん。」

「わり。寝坊した。」

「だと思つたよ。美和も賢明もそつ思つてるから言い訳はしなくていいよ。」

「あつそう。ほらよ。」

「ありがとー」

「今日はなにしたんだ?」

「3人しかいないから、ジャマバスケとか。」

「ふーん。バスケ部いなかつた?」

「外でやつたから!」

(“節ちゃん” … “俺ん家” … “バスケ” …)

逞真はそのやり取りにただ眉を顰めるばかりだ。

「とりあえずあがつてよ。暑かつたから冷たいもんでも出す
「ハア! ?」

裏返つた声を出したのは逞真。

「ほら、お兄さんも嫌みたいだし、遠慮しとくよ。」

「お兄さん” … ”

「あー、こやつのことは気にせんぞ! 」人の教師のくせして人見知り激しくてさあー。」

逞真の肩をバシバシ叩く。

「教師……」

「そ。」

「北中学校数学教師・駿河逞真だ。」

教師とこう言葉に敏感に反応する男子高校生。

「ホント、やっぱーいわ。俺ねむーから家帰つて寝るし。」

「遠慮しないでつて！ホレホレ！」

聖奈は彼の腕をひばりつて無理矢理中に引きすり込んだのであった。

「んじゃ、まずは紹介するね。」

アイステイーの置いてあるコンビニで、唯一ここに来るのは聖奈だけだった。

「うーか、やっぱーも言つた通りの兄ひやん。北中学校の数学教

師」

逞真は会釈すらせず腕と脚を組んでただ男子高生を舐めるように見ていた。そんな様子に聖奈は咳払いして兄の腿を叩いた。思わず聖奈に振り向くとジロ・・・っと睨んでおり、しぶしぶ逞真は腕と脚を組むのを止めた。

「んでも、こいつちは私の高校のお友達? 2年A組の津田節君。つだせつ」

「ちーっす・・・・・」

やる気のない声。

「ほつ、”友達”ねえ・・・」

「そんで、あと美和、って前に家に来た女の子いたじゃん。その子とまたも高校のお友達の賢明君で仲良し組作って毎日校庭で遊んでるんだ。みんなクラスメイトなの。」

「フツ、そうか。彼だけが仲のいい友人、というわけではなくて安心したな。で? いつどういう関係で今のようになつたのか、兄として教えてもらいたいものだが。」

逞真の言葉は嫌味たっぷりだった。節も負けずと嘲笑する。

「こいつちこそこ、なんでお兄さんと敢えて同居してんのか、友達として訊きてえんだけど。」

二人の間に火花は絶えない。

「ちょっとお・・・・初対面でなに? ち、ちゃんと説明するから落ち着いて聞いてて。まず節ちゃんとの出会いから。」

それは・・・一年生の春だったね。まだ友達も少なくて中学も同

じだつた美和といつも一緒にいたんだ。自転車通学になつた、ある田のこと。ギシ・・・と自転車が鳴つた途端、ペダルが進まなくなつてしまつたのよ。降りてみてみると、チヨーンが外れた。

『美和あ～、どうしよ・・・』

『そんなこと言われてもあたしこんなの詳しくないからな・・・』

『・・・どうしたの。』

その時、賢明がやつてきた。まだその当時は親しくないしむしろクラスにいたような・・・って感じだつたけど、賢明はボランティア精神があつて誰にでも親切で優しいから、好奇心で近づいたんだと思つ。

『チヨーンが外れちゃつて。』

『あー、よくあるよね。ちょっと見せて。』

賢明は私の自転車を触つたりいじつたりして呟いた。

『複雑な作りだね。』

『あ、これお父さんがこだわつて買つたやつなんだよね。ま、何年も経つてるけど。』

『俺にはちょっと無理だな。』

『いいよいよ。手伝ってくれてありがとー。』

『でもそれじゃあ駿河が押して帰ることになるじゃんか。女がそんな重労働することないよ。』

『うわ・・・ジエントル・・・・』

『誰か近くに・・・・あ。』

遠くに人影が見える。賢明は微笑んでその人に手を振つた。

『おーいー節……ちよつと来てくれねーっ！？』

人影は無言で寄ってきた。

『……なんか用？』

第一印象がまず不良だったのね。無愛想だし、チャラいし。正直私はドン引きしてたよ。

『チエーン外れたんだって。直してくれない？』

『……これ？誰の？』

『あ、私！』

『……あれ、アンタどつかで見たような……』

『おいおい、同じクラスの駿河じやん。最初教室の前でズッコケて一躍有名になつただる。』

『あー、あんときのアホな女？駿河つてんだ。いい名字だね。』

『ンぐ……』

私は悪口を言われて頬を膨らましたけど悪い気はしなかった。後味に褒めてくれるし、無愛想かと思つたら意外とフレンドリーだから。

『なら見てやつてもいいぜ。』

節ちゃんは口端を上げて私の自転車を見始めた。

『な、なんなの？？』

『こいつ、俺と同じ中学だつたんだよ。技術的なことが凄く得意でれ。』

『へえ、ならなんで工業高校とかじゃなくて普通科の高校來たの？』

『それは・・・』

『馬鹿だから。』

自分からそう発した節ちゃん。でも妙に黙った。ここにレベルつて工業より結構上だつた気が・・・。もしかして馬鹿つてそつちのバカじやないのかも。

『・・・乗つてみて。』

あつといつ間に垂れ下がつたチーンは元通りだつた。乗つてみると、ペダルが動く。

『ぎや、ありがと!助かつた!!』

『あとそれ、空氣入れ直したほうがいいよ。抜けてる。』

『わかつた。』

節ちゃんは無言で立ち去つてつた。

『気にしないでくれるか?アイツ、どこかひねくれてんだ。』

『うん。そんな気がしてた。』

『反抗期っぽいよね。』

『じゃ、氣を付けて帰れな。』

『ありがとー!..』

そして私たちは賢明と別れた。これが、4人のすべての始まりだつたわけ。

その日から、クラスで会うたび声を掛けあつよになつて、すぐに仲良しになつた。昼休み、昼食を食べる時、ふと美和が言った。

『ねえ、ついで仲いいんだし、自分で呼ぶのやめない?』

「確かに。」

『別にいいだろ、めんどくせえ。』

『はは、節ぢやんは賢明と違つてめんどくせがり屋なんだね。』

3人が沈黙した。

・・・賢明はわかるけど・・・節ちゃん?』

『節ぢやんて、どうした？』

『俺、戦争アニメの女の子と同じあだ名かよ。』

『字は同じだけどな。』

『うるせえ！あつちは子がついてるだろ、子が！』

節子

ああん?なんだよ聖奈。指差すんじゃねえよ!『

『ほらー、自分で名前で呼んでんじゃん！』

「チッ、だつたらもういい! 之前で呼んじゃねえ! 」

ウニイテ

私たち3人はハイタツチした。

それから、よく校庭で遊ぶようになった。毎日、放課後。

「そして、今みたいになつてゐるわけ。・・・ぢ?兄ちゃんなら理解した?」

「・・・割とい
「よかつたー！」

逞真は再び節を睨み始めた。

「だが、本当にそれだけの仲なのか、怪しい気がするが・・・」

節は黙つて逞真を見ながら一ヤリと笑っていた。

「これから、あんなことになるなんて知りはずに・・・

第2話 津田 節（後書き）

次回もよろしくお願ひします

第3話 苛立ちの上に輝くヒカリ（前書き）

聖奈視点です

第3話 苛立ちの上に輝くヒカリ

「つたぐ、苛つくなあー。」

八つ当たりするように節ちゃんはサッカーボールを蹴った。でも、賢明はそれを軽々と足で受け止めた。

「何がだよ。この短気。」

「短気じゃないし。」

「いや、絶対短気だよ。すぐ不機嫌になるし。」

「モーセーーーうちら何も悪いことしてないのに~」

私たち3人で責めまくると節ちゃんはすねたようにやつぽを向いた。

「あつそうがよー。」

「だからよ、何があつたんだって訊いてるじゃん。」

「あつ、もしかして昨日のこと?~」

「昨日?~」

私のほうを向くのは賢明と美和。

「昨日つて、節来なかつたよな?~」

「そうそつ、どうせ寝坊でしょ。なのになんかあつた訳?~」

「私のスクールバッグ届けてくれた。」

私はそう言いながら賢明からのボールを受け取る。

「へー、気が利くじやん。」

「そうだよ、俺めっちゃいいことしたんだからな！」

「じゃあなんで苛ついてんのサ。」

「あれでしょ？うちの兄ちゃんが気が合わなかつたんだよどうせ。」「どうせって言うな！ホントなんだよあの兄貴！」

美和にボールを蹴ると、呆れた表情を節ちゃんに見せてみた。

「まあ、うちの人変わつてるのは認めるけどさ、初対面でそこまで言わんでよ。妹としてへコむ。」

「聖奈の兄ちゃんつてあの人でしょ？前に遊びに行つたときについた人。」

「そうそう。」

「え、別にいいじやん。真面目そうで、聖奈とは真逆だけど。」

「ぜんつぜん！俺は嫌いだね、ホント駄目だわああいう人。しかも教師だぜ？何言われるか堪つたもんじやねーよ！！」

「まあまあ、落ち着けよ節。ただ会つただけなんだろう？大丈夫だつて！」

賢明は面倒くさそうに言つた。

「でもまた会つせりきつと。」

「もう、他のこと考えよつよ。節そればっかり。」

美和が節ちゃんにボールを受け渡した。

「あつそうこえばやー」

節ちゃんが回転させるように蹴ったボールが空に上がった。

「今夜、花火しねえ？」

「いってきま～す。」

玄関口でそうこうと、兄ちゃんはそれなりに慌ててリビングのドアを開けてきた。

「待て聖奈。どこへ行く？」
「だから友達と花火だつて。」
「・・・まだ明るいぞ。」
「いいよ、暇つぶしなら余るほどあるんだから。」
「友達と言つのはアイツとかか？昨日の・・・津田。」
「なにその言い方！何も悪いことしてないじやん。節ちゃんは。」
「でも不良だろ？あの男。そんなやつと一緒にいただなんて見損
なつたぞ。」

「身なりとか態度とかはそりや悪いかもしないけど、でもいい奴
なんだよ。兄ちゃんにそれがわかるかっ！？」

兄ちゃんは壁に寄しかかり、馬鹿にしたような口調をし始めた。

「それはわからないさ。俺はいつだってお前を監視してるわけではない。だがな、一つだけ言えるのはそれは仲がいいからだよな？それでああいう態度を取るのであればどっちみち同じことだと思つが？」

「最低」

私はめいにぱい兄ちゃんを睨んで玄関のドアに手を添えた。すると兄ちゃんの手が私の腕を掴んだ。

「...」

待て、これだけだ。いつ戻る？」

「まことに、門限一〇時三〇分。一歩も出でぬ

「八時三十分、門限を終り、一秒たりとも見送らない」

「それくらいは守れ。じゃないと変質者がナンパしに来るぞ。」

「馬鹿か！？」

兄ちゃんは本気のキレモードになつた。

「そして危ない方向に進んでいつたらどうするんだよ!」

「冗談だつてば。そんな怒らないでよ。」

「兄ちゃん、ホントしつこいでて。

兄ちゃんは溜息を吐いて腕を放した。

「気を付けて行つてこい。」

「は～い。」

少し反抗的な態度で私は家を出た。だって、過保護だよ。節ぢちやんの言つてることわかるかも・・・

「おっせーぞ聖奈！」
「ゴメン！！」

河川敷にはもう3人は集まっていた。 そうだよねー・・・ハハ。

「聖奈待つてたら暗くなっちゃったね。もう始めちゃう?」

「そうするかー。」

「あれ、私のせい?」

「当つたり前だろ!ー!」

「ゴメンチャイ?」

地面を見ると、たくさんの花火があった。

「これ全部用意したの?」

「2袋は美和の。妹がもらつてきたんだと。」

「あとは俺と賢明で買つたんだぞ。その分はあとで何とかしろよなー!」

「わかつてますゼイ!」

私は手をグツチョブさせた。

そんなこんなで小さな花火大会が開催された。

まずは手持ち花火。

そのままじやつまらないから、ーーは高校生風。ってかうちら風

何本もいろんな種類の花火を持つて、一気に振り回す。これは毎回やつてることだ。

節ちゃんなんて花火を股に挟んで「小便小僧」とか言いやがったよ。アホ！ 賢明は文字書いてるし。とにかく楽しい！

いつの間にセットしたのか、節ちゃんは打ち上げ花火に火をつけた。

それらはパンツと音を立てて空に舞った。そしてパアツとヒカリが輝いた。

「やつぱい！ パアーツとなつてさ。モヤモヤしたことなんて吹つ飛んじゃうし！」

「確かにー」

兄ちゃんのことなんてすっかり忘れていた。

でも、その楽しさは一瞬にして消えてしまった。気が付けば門限の時刻だった。

「あーっ！私帰んなきやー！」

「なんて？またこんな時間じゃん

門限に立たれながらたま

「へへひなんでも敵」

「そうなのにな！ ああ、ホントヤバい。んじゃねー」

私は急いで自転車に跨った。

「聖奈ーー！明日も来るよな！？」

そう叫んで足早にペダルをこいだ。

急がなきや。あと5分もない。

そう思いながら帰つてくると、やつぱりアウトだった。兄ちゃんはドア「」しで腕組みをしてくる。

「ねえ兄ちゃん開けてよ。」

「嫌だね。俺は言つたはずだ。3分7秒の遅刻だぞ。」

「そのくらい許したつていいじゃん！本当に入れてくれないの？」

「当たり前だ。自業自得。」

「なんで！？どうして友達と遊ぶことにそつやつてケチつけるの？」

「ケチはつけていない。ただ約束事を守らないのが悪いんだ。」

「そんなに節ちゃんが気に入らないの！？でもだからって今まで許してたことをせ、厳しくするのはなんてこうの・・・卑怯じゃない！？」

「・・・・」

沈黙がつまれた。兄ちゃんは否定はしない性格だけビリ「やつて逃げる。

「・・・・。そうか。それならそこで大人しくしていなさい。」

兄ひやんはそつ狂お詮てて玄関から消えた。・・・・信じりんな
い。

夏だから、寒いことはない。でも、じっとしてるのは結構キ
ツイことだった。

私も頑固だよ。そりは兄ひやんを同じ。だから粘つてじで待ち
続けるぞ。さて、どっちが勝つだろ？

負けないよ、兄ちゃん。私は悪くないから。

何分経つたかわからない。その時、玄関の電気が点いた。

と思えばドアが開いた。

「・・・お前ってさ、頑固だよな。そこだけは俺と同じだ。だが、
今回は俺の負けだ。」

私はフツと笑ってやった。

「早く中に入りなさい。そして風呂入れ。顔に煤がついている。」

・・・もしかしたら兄ちゃんは私を心配してたのかな？やっぱ、
過保護だよ。でも、なんか嬉しい気もする・・・かな？

そのあと洗面所で顔を見ると、確かに顔は真っ黒だつたりして（笑）

第3話 苛立ちの上に輝くヒカリ（後書き）

更新が遅れてしまい、すみませんでした^__^
次回もよろしくお願いします

第4話 高校生らし

「おー、200円ーちゃんと取れよなー！」

「200円って何さー!? 節ちゃんから頼んだくせにーーー！」

と、大声で叫び散らしながら話しても全然大丈夫。というのも、
「」は街にあるゲームセンターなのだから。

節が聖奈のことを”200円”といつているのには理由があった。
アホらしいことだが、節はUFOキャッチャーが大の苦手で、無理
矢理聖奈に押し付けたのだった。

「まあ、いいじゃん。聖奈、こいつの得意でしょ？」

「美和あー、なんで君までそんなこと言つんだい? ? ? ま、そーなん
だけど・・・」

「ならいいじゃんか。やれば?」

聖奈は約3名に勧められ、しぶしぶ聖奈は2枚のコインを入れた。

「取れるかは保証しないからね!」

「へいへい。」

ボタンを動かし、ぬいぐるみのほつぐ。

「何取ればいい？」

「あれあれ。カツパのヤロー。俺、凄くハマつてるんだよね。」

「・・・うちの従弟にもさ、カツパとか妖怪好きな子がいるんだよね。全く意味不明なんだけど。」

そう言しながらも、聖奈はそのカツパを掴む。

「うわ、聖奈って手つき上手いな。勉強以外のことはどうだろ。」

「

「ヤツと笑う賢明を聖奈はじと田で睨んだ。最後に持ち上げボタンをポンと押すと、カツパの下にある違つぬぬいぐるみまでとれた。

「あ、一つ取れちつた」

「おお！…流石聖奈じやん！…」

下から取り出すと、それはトラ模様の猫だった。

「ぎゃ、可愛いじやん？ なにこの感じ…キュンキュンしちゃううー！…！」

思わず聖奈はそのトラ猫のぬいぐるみを抱き締めた。カツパのぬいぐるみをとつた節は少々呆れ顔で笑う。

「だったらそれ聖奈がもうつていーぜ。」

「え、マジー？」

「だつて俺これ欲しかつただけだし、取つてもうつた恩だよ。」「うわ～！！ありがと、優しい男の子。」

「さーて！次ビニ行くー？」

「え、まだ行く感じ！？」

「今日はパーツと盛り上がる日だろ！？それともなにか？またあの生真面目兄貴に門限つけられてんの？」

「い、いやそういうじゃないけど・・・」

聖奈は一度、ドアのほうを振り向いた。聖奈は学校の講習に行つたきり、家に帰らないまま、街に来たのだった。少し、不安な気持ちが抱かれる。

(でも・・・ま、いつか。ビーツせかるーく心配するだけでしょーよ！)

再び無邪気な顔に戻った。

「ねえ、次カラオケ行こーよーーー」「お、いいじゃん。」

「ギャオ～！ギャオギャオギャオ～！～へヘイ 皆一、盛り上がりてるか～い！～？」

爽やかな笑顔でマイクを握り締める聖奈、以外の同室しているメンバーは皆耳を塞いでいた。

「な、なあ、聖奈が歌ってる歌詞、全部”ギャオ”ってしか聞こえないの、俺だけか？」
「いや、俺もだ・・・」
「そんなこと言つたら、誰だつてそう聞こえるし（汗）」

賢明は辛うじて美和に近づき、耳元で声を張つた。

「聖奈つてあー！」

「うん！？」

「合唱、こんなんじゃなかつたよな～・ビーチをビーチすればこんな芸術的な歌い様になつたんだ！？」

「あのねーっ、聖奈合唱とか真面目な状況になると、ちやんと音取るのーでも、フリーのカラオケとかになると、ド音痴魂が発動されちゃつて、こんな感じになっちゃうわけ！～！」

「マジかよー?」

歌声に耐え続けていた勇者・節も、我慢の限界に達し、嘆いた。

「聖奈!いいから歌やめろ!..」

「ふえ?」

「俺に貸せ!」

節は乱暴にマイクを奪い、自分の選択した歌に切り替える。

～・～・?～・・・・

節の発する歌声は存外素晴らしい。

「うわ〜・・・節つて歌上手かつたんだね。」

「俺も、初めて聞いたんだけど・・・ハンパなくね?」

「フンだつ!これくらい私だつて歌えんのに。何で奪りやがったの

訳!?」

「いや・・・わかんないほうが可笑しいだろ・・・。」

「これでよかつたんだよ、はい黙ろうか!」

「ブ〜・・・・・」

しかし、聖奈は悪い気はせず、むしろ楽しかった。

時計の差す時刻は、もう7時30分過ぎ。そんなこと、聖奈の今
の心は知る由もなかつた。

一方、逞真のまづはといふと・・・

「ただいま。」

会議を終え、自宅に帰宅していた。

「・・・? 何故室内が暗い。聖奈・・・?」

電気を点け、辺りを見渡す。

(靴もないし、いる気配はしないな。・・・まさか、まだ帰つてきていなか?)

逞真の表情は段々渋みを増していく。

「大丈夫・・・だよな。高校で、何か頼まれごとでもあるんだね?」

中学生でもこれくらいの時刻に帰つてきてもおかしくないんだ。な
にを心配することがあるんだ、俺。」

自分に言ひ聞かせてこむといふでもう眞に冷静さは消えていた。
必死に心を静めている。

(落ち着け……。聖奈はもつガキじやない。)

重い溜息を吐き、鞄を置いた。

でも、いくら経つても聖奈は帰つてこない。もう8時は軽く過ぎ
てこるので。

(本当に、大丈夫なのだろうか……。)

すると、外のぼつで救急車の音が鳴り響く。

(まさか……聖奈の身になにか起きていないよな……?)

時計を見て、静かに首を振る。

(1時間待とづ。)

「なんでだる、こんな軽い食べ物なのに、お腹満足するんだよ

聖奈は「ラッペパン。（アーモンドを使ったトッピング仕立て）
美和は今ハマっている梅おじやつ。（コンビニおじやつで味が違う
らしい。）
賢明は意外と泣く、おやさん。（これもコンビニおじやつで味が違う
らしい。）

コンビニの外で、4人は軽い夕食を食べていた。
節が食べてるのは聖奈が勧めた新商品・チョコストロベリー＝ミックスまん。（マカロン風）俗にいうスイーツ系のものだが、甘いものには田のない節にとつては幸せの塊。おやつに入らない食べ物だった。

「うわ、マジうめえんだけど…」
「でしょー？？これ、私のおススメ商品だから」

ね。」

「それは、友達と食べてるからじゃない?..」

「あ、それ言へてる。」

微笑みながら、それぞれ食べ物を頬張る。本当に幸せだった。

「ねえ、やるそろ帰ないとヤバくねえか?」

不意に賢明が呟いた。見ると、辺りは真っ暗だし、時計は9時をまわっている。聖奈もハツとした。一番浮かんだのは、兄の顔。そして考えられる言葉。

『『どこ』に行つてたんだよ、この馬鹿。そんなに兄に心配させたいのか?しかも俺が否定していたあの友達とこんな時間まで一緒にいたなんてな。何をしていた?・・・何にせよ、これからはこのようなことが起きないよう、聖奈の行動を制限せてもらうが。』』

考えただけでゾッとした。

節は淡々とした顔をしてくる。

「まだこんな時間じゃねーかよ。なに?お前親つるせえ感じ?窮屈だな。」

「私んちも何も言われないよ。高校生なんだし自分で行動に責任持
ちなさいって。」

「あー・・・、俺も美和のよつなんだが、流石に『おまじする』
同居してこる奴くらいい心配するだらうと思つてよ。」

「聖奈は？」

「え、わ、私？」

急に振られ、ただ戸惑つていた。

「私は・・・・・」

正直言われたことは一回もない。ただ、行動で示されただけだ。
門限つけられたり、冷酷な瞳を見せられたり。

「なんも言われてないやつ

「そつか。あの兄貴でも『れくら』のことは許すんだな！」

節の顔が本当に嬉しそうで、聖奈は本当にことを言えなかつた。

「じゃ、賢明は帰つていいぞ。兄弟だつているもんな。」

「ああ。わり！」

「じゃあね」

「また明日ーー。」

「おうーー。」

賢明は自転車を飛ばし、帰つていった。

「んじゃ、最後に寄りたいところがあるんだ。2人とも付き合つ
くれねえ？」

「別にいいけど、どこ行くの？」

「いいから。」

二口二口している節の背後を、一人は不思議そうについていった。

ドンッ！

逞真は思わず机を叩いた。

「なんだ・・・? いつになれば帰つてくるんだよ・・・。」 こんなに遅くまで、一体何をしてるんだ? 「

途端に、携帯電話が振動する。逞真は冷や汗を搔きながら、耳に傾けた。

「もし・・・もし」

「あ、駿河先生ですか？」

一気に緊張が抜けた。

「はい。 そうですが？」

「1年3組の神路です！」

「おう、勝か。 どうした？」

「明日、参観日ですけど制服なんですか？ごめんなさい、親が訊けつてうるさくて・・・」

「ああ、構わないよ。こちらこそ、不足していく済まなかつたな。・

・・ジヤージで結構だ。親子レクを行つからな。」

「わかりました！おやすみなさい！・・・」

「ああ。 おやすみ。」

携帯をしまい、フツと溜息を吐く。

「・・・クソ・・・・！」

舌打ちし、素早く家を出ていった。

(この馬鹿野郎。)

手当たり次第に駆けていく。

(もし何かあれば、俺は、俺は愚か者じゃないか・・・妹一人守れない、情けない男じゃないか・・・！・！)

歯を喰いしばるたびに、胸の鼓動が速くなつていった。

「あやつー。」

聖奈の叫び声に誰もが振り返る。

「ど、どうしたんだ聖奈？」

「うわあ～ん、痛い～！！

「はあ～。」

見ると、聖奈は床に落ちていたバナナの皮を踏んで転んでしまっていた。

「うわ、見事にこんな場所に落ちたとは。妙分、ポイ捨てかな？」

「逆にすごくな？ バナナの皮で本当に転ぶんだ・・・。」「結構痛いんですけどっ！！」

それもそのはず。右足からは出血。

「大丈夫？」

「おうよう。これくらいでくじけてどなんすんねん！」

「その気合ならこれからーー走走つても平氣そうだなー。」

「お、おうよう！！」

人気のいない、草原を抜けると、そこには大きな木が月夜に照らされていた。

「へえ、なにここの・・・綺麗・・・」

「だろ？俺が見つけた秘密基地。街からそんな遠くないのに、人ひとり通らねー。」

「節ちゃん今までなんで教えてくんなかつたの？」

「だつて、こんだけ月夜が綺麗な口は少なかつたんだ。お前ら親友には、どびつきりいいもん見せてやりたくてさ。」

美和と聖奈は顔を見合わせる。

「あーあ。賢明はもつたいないねー。もう少しいればこれ見れたのに。」

「あ、大丈夫。あいつには一度ここ見せたことがあるんだ。ま、昼間だつたしこんな綺麗じゃなかつたけどよ。」

「なんだ。なら、話しあげるね。ここ、私たち4人だけの秘密基地にしようよー。」

「そのつもりで私らここにつれてきたんでしょ？？」

節は苦笑した。

「ああっ。」

3人が微笑んだとき、聖奈はふと人影が見えた。

(ん・・・?)

よくみると、聖奈は顔を歪ませた。そちらもとっくに節たちに気づいていて、ただ睨んでいた。

「どうしたの？ 聖奈。」

「あ、私、もう帰るね！ 急に眠くなってきてヤバいわ。んじゃね
お、おい！」

聖奈は足早に草原を抜けて、例の人物のもとに走った。

「こんばんは、お兄さん。」

「こんばんは、聖奈さん。」

その冷ややかな言い方に、聖奈は頬を膨らませた。

「なんだよ・・・、言いたいことは大体わかってんだからね！ バン

バン言つてくださいよう！ 覚悟はできます。」

「何の話だ？ 僕はただここを立ち寄つただけなのだが？」

「へ？」

思わず彼の顔を見た。ズボンのポケットに手を突っ込んで不機嫌
そうにしている20代の端整な顔の男は、正しく兄・逞真だった。

「立ち寄つただけ？待つてください、君は駿河逞真ですか？」

「君というな。当たり前だらう。他に誰に見えるんだよ。・・・俺も散歩にぐらい行くや。」

聖奈はますます反抗的な顔をした。

（ウソばつか。だつて、自分で気づかないの？革靴は走り過ぎて磨り減つてるし汚れてるし、せっかくのスーツもシワだらけ。いつもならどんな日でも帰つてくれば私服に着替えてるのに、スーツつてといじみがもうおかしいじゃん。それでも意地張つてるつもりなの？）

「ふーんそなんだ。あ、さつきの場所、4人の秘密基地だから誰にも言わないでね。」

「フツ、高校生がこんなところでお遊びか。馬鹿で、ある意味高校生らしいよ。」

「なに、その嫌味つたらしい言い方。別に高校生が遊んでても違和感ないじゃない？」

「確かにそうかもしけないな。現代の奴らにすれば。」

語尾の言い方が、あまりにも冷酷で、なにか怒りが含まれているようだった。

「つ・・・とにかく帰らうよ！私見つけたつてことは帰る気まんまんなんでしょうせ。」

「まだ散歩を続けてもよかつたのだが、こんな暗がりだしな。複数のほうが安全だ。」

聖奈は、逞真が意地つ張りだと改めて思った。本当は自分のことを心配して探しに来たんだと知っていた。見え透いてる行為なのに、

遅真はそれを続けていた。聖奈はなんとも言えない気持ちになつた。

(どうして、怒らないのかな?いつもなら怒鳴るはずなのに。いや、兄ちゃんは声張り上げないか。睨みつけるんだ。でも今日は違う。)
…)

歩いつとすると、急に右足が痺れたように痛んで、聖奈は息を詰まらせた。

「・・・どうした?」

「別に。」

なんとなく、今の遅真に甘えたくなくて、聖奈は何もない様に歩き始めた。

「・・・・」

遅真は右足に勘付いて、スカートの裾のすぐ下に触れた。

「うわっ、変態!!

「怪我したのか!?

久々の遅真の荒げた声。思わず言葉に戸惑う聖奈。

「・・・そう、だけど?」

少し不器用な言い方になつてしまつ。

(ホラ、やつぱり心配になつてきたんじゃないかな。)

「痛くはないか? というか・・・何があつた?」

「何があつたって・・・大袈裟だなあ。ただバナナの皮にズッコケただけだし!」

「バ、バナナ・・・?」

「ハツ・・・」

しまつた、と聖奈は思つた。ここでギャグを使うつもりはなかつたのだが、つい口を滑らせてしまつた。(つていうか、本当のこと)を言つただけだが。

「なんだつて? バナナに足を滑らしただと?」「だから何さつ! - (恥)

我慢が出来なくなつた逞真はブツと笑つた。

「お前、本当に馬鹿だなあ。」

「もつこじやん! はやく帰ろつて! -」

そう、聖奈は逞真の背中を押した。

「はいはー。」

逞真も呆れたよつて歩き出した。

「講習が終わったのは約4時30分。5時間ほど遊んでいて、乐しかったか？」

「え？」

不意に逞真の言つた言葉が眞面目なことになつて、聞き返してしまつた。

「俺は、そこまで楽しいことなのか解らない。友人とそんなにいて疲れないのか、逆に関係が崩れることもあるんじゃないのかと考えてしまう。増してや、見た目が大人に対して反抗丸出しのようなやつと一緒にいて、自分も流されてしまふんじゃないかと思つことはないのだろうかと思うんだ。」

聖奈は初めて逞真の本音を聞いた気がした。

「・・・そんなことないとおもつなあ。私、とても楽しいもん。でも、兄ちゃんはきっとそう思わないんだろうね。」

「・・・」

「だつて、私と兄ちゃんは違う人間だもん。」

その瞬間、逞真の表情が一瞬虚を衝かれたものとなつた。

「兄ちゃんは眞面目で、しかもプライド高いじやん。だから、他人に惑わされたくないって思うんじゃない？でも私はそれが人を逆に信じていよいよに見えるんだ。やつぱり入つてそれぞれだよね。」

逞真は嘲笑を浮かべた。

「まさかそれを、妹に言われるとは・・・。」

しばりへ空を見上げ、逞真は囁くよつて言った。

「お前が友達の大切さを選ぶといつのであれば、俺は、なんでもかんでも入り込む必要性はないな。」

第4話 高校生らしき（後書き）

逞真はただの心配性だつたんでしょううね。
でも、聖奈の一言で変わりました！

次回も宜しくお願ひします

第5話 青葉・砂浜・恋心？（前書き）

津田節視点です

第5話 青葉・砂浜・恋心？

昨日、夜遅くまで遊んだせいか、今日はやけに眠づけた。

気づけば時計は11時半だからな・・・（呆）やっぱ、ちゃんと睡眠時間はとるべきもんだ。うん。また賢明に説教されて、聖奈と美和に茶化されるんだろうな。ま、もう慣れたんだけど。

ふとケータイを見てみると、メールが入っていた。賢明からだつた。

遅い！（笑）ま、寝坊だつてことは言わんでもわかってる。それより、今日からの集合場所はあの草原だつてな。やつと一人に教えたんだな。早く来いよ！――賢明――

「ふんつ。」

思わず笑つてやつた。言わんでもわかってるしー。

俺は服を着替えて、階段を下りた。

「よおーっ！」

「あ、寝坊助節子がやっと来た！…！」

「子、付けんなって何回言えばいいんだよつー？」

笑いながら、3人のいる木陰に身を寄せた。

「あつちーのに、ここは涼しいよなあ。」「

「節ちゃんも偶にはいいとこ見つけれるよね。」「

「偶にってなんだよ！」「

「でも、前みたいに高校のグラウンド使わないでいいから、楽だよホント。今日は何する？」「

そう賢明が俺たちを見ると、聖奈が不意に言つた。

「夏休みついで、もうそろそろ終わっちゃうよね。」「

「あー、あと何日だつて？一週間切った？」「

「うは、俺宿題せんせん終わつてねえやー！」「

「だから言つてみじやんかよ。初めのほう終わらせてたつて。」「

俺と聖奈と美和はムツと賢明を睨んだ。

「そんな早くおわんの、賢明へらいだろ？」「病院の跡取り息子と一緒にすんなー」「じうせ成績トップの奴とアタシらは違うん

皆、言いたいことは同じみたいた。同時に言われて、賢明は苦笑する。きっと何言われたかハツキリわかんないだろうな・・・。

「んでえ、話戻るけど、もう少ないじゃん。なににさ、まだやり残したことなるなーって感じしない??」

「ん、確かに。なんかこのまま終わる

「来年受験だしね。楽しめんの今だけじゃんーだから、やつ切りつ
べー!!」

正論だと思つたが、ホント。獨りでここに来て、仕返しだ。

「おまえの仕事は、おまえの仕事だ。おまえが仕事で困るなら、おまえの仕事だ。

「だよねだよねー夏とこえは海じやんー。」

女子一人は勝手に盛り上がつてた。そんなにいいもんかあ？海。

「えー、あつちーだろ?」

それにここ内陸部だし遠いじゃん。川ならあるけど。

「川で泳ぎたくないっ！」

「遠しけどしけなし距離じやなしじゃん！！同じ陸なんたもん、
「そんなこと言つたらなんだつてアリになるだろー・・・？」

2人の活き活きた顔を見詰め、俺と賢明は顔を見合わせた。

「きやつほー……ねえ、海が見えるよー……！」

「うわ、キレイ……！」

案の定、海には行くこととなつた次の日。なんでも・・・

『いやあ、ダメもとで親父に頼んだらさ、アッサリOKだつたさ。海の近くに別荘もつてるからそこ使えて。』

『流石病院の跡取り息子つーよろしくお願ひーー！』

みたいなことになつたらしい。ナイスなのかKYだったのかわからんが、思い出作れるんだつたらいいか。恩に着るぜ、賢明

「ふと考えたんだけじでー、海の近くに住んでる人つてこれが当たり前だから、こんなに喜ばないんじゃねえ？そつかんがえりや、こいつら、ま、俺たちも含めて幸せ者だよな。」

ああ、そう考えたらしい。バスに揺られながら、俺は苦笑せざるをえれなかつた。

「聞こえてねーよつだよ。」

聖奈と美和の顔が、無邪氣だった。

バシャン！－

みたいな感じに波のしぶき音が聞こえたかと思えば、もうほんや女子一人は泳ぎ回っていた。

「泳ぐの早っ！？」

「だつて、もつお顔だよ？なんか」んかやつてぬいひに田元が暮れちゃうよ！」

「・・・それはいいんだだけじゃ。」

「ン？」

俺は聖奈の辺りを見てブフッと吹いてしまった。

「うきわってなんだようきわって！」

「だつて泳げないんだもん！海の水つてしょっぱいから尚更飲みたくないでしょ？」

「泳げなかつたんだ・・・」

聖奈は例のうきわでばしゃばしゃ泳ぎながら、美和と何やら話してはいた。不思議に思ったその瞬間――

「『えいつー』」

俺たちは一人にみとも簡単に水をかぶされてしまった。

「」「ひーっ！ 節も賢明もちゃんと泳がないとダメじゃん…！」

「早くきなよ～」

賢明は苦笑して、服を脱ぎ棄て海に飛び込んでった。・・・マジかよ。

「おい、節ーーお前も早く来いって！ 結構気持ちいいぞ？」

「わ、わかってるしー！」

慌てて服を脱ぐ。海パン姿になつてもまだためらいだかつた。

我慢できなくなつた美和が俺の腕を引っ張る。

「ゲッ、待てってーー心の準備が・・・」

「心の準備だアーー？ ビーセ節はスイスイ泳げちゃうんだしいいじやんか！」

み、美和ーーそんなに引っ張るなよーーう、うわうわ・・・波が・・・
・・・

バッシュンーー！

「あーーーーやめろやめろーーー俺はヤだからーー死ぬって（恐）」

自分でも驚きだ。こんなにバーンとなるとは・・・。

「せ、節ちゃん・・・・？」

「も、もしかして節も・・・・？」

「 「 「 カナヅチ？？」

俺はやつとの思いで砂浜に上ると、息を上がらせた。

「マジかよ！？お前スポーツ万能じゃないのかよ！？」

「聖奈みたい・・・」

「私はまだいいじやん！水怖がんないんだもん。」

俺はムツとした。

「俺だつてプールだつたら泳げるし！でも・・・海は駄目なんだよ！..ガキンと水、おぼれかけて、しかも目の前魚泳いでて・・・トライウーマになつちやつたんだよ！！」

3人は顔を見合させてブツと笑いやがつた。

「なるほど、そつちね。」

「ご愁傷サマつ！」

「節にそんな過去が・・・www」

馬鹿にしたように笑われたが、妙に腹立たしい気分はしなかつた。一応、いじけたようにそっぽを向いておいたけどな。

「それじゃ、海で泳げない節のために、違う遊びでもすつかー！」

「「そーしてやるーーー！」」

「なんだよ、そのイヤヤ・・・・・・・・」

つとこつことで、ビーチバレーをして思つ存分遊んだ。そこいらへんにいる海水浴客のなかに、俺たちくらいの歳だったり、大学生みたいな人がいるが、俺たちのように楽しんでいた。多分、そちらか

うもやう思われてるんだろ。

「聖奈、やつちーー！」

「おひよーー！」

ベグシヤツ・・・・

ああ・・・こんな立派な転び方をした聖奈を褒めてやがりしゃね
ーか。

あつとこゝ間、そんな言葉もあつたな。今思えば、この時が一番
当てはまつた気がする。気が付けばもう夕方だ。

「えー?なんかもう夕日が海を沈んでく言わば美しい光景になつて
るんすけど・・・今何時!?」

「6時・・・40分。」

「早い・・・。」

お互いに顔を見合せた。

「まだ遊び足ない〜・・・」

「そのための別荘だよ。まだ遊べるつて!」

「そつか。」

「でも・・・海はもうダメだね。皆テント張ってる人ばかり。」

「んじゃ、別荘に行こうぜ。」

何故か、後ろ髪が引かれる思いだった。友達と行く海は格別だったのかもな。

別荘についても、大して楽しいこともしないで、飯食つてトランプやつたり軽い遊びしかしなかった。

案の定、聖奈をはじめ美和も俺も退屈感を感じた。賢明は苦笑した。

「仕方ねえなー。あ、ここ少し歩いた場所に心霊スポットあるんだけど・・・」

その言葉に、聖奈はガキのよつに反応した。

「なになにっ！？そこホントに出んの？？」
「ん～・・・出るらしくよ。体験者いるんだってよ。」「マジでえー？ね、こここりゃ」

勿論美和は大賛成。

「節は？」
「あ、俺も行く。」「ヤツタネ」

つところことで、俺らはその心霊スポットやらに行くことにした。意外にサラリと行く感じになつたけど、そんで悪霊に憑りつかれたらどうすんだかな。

でも、俺たちは忘れていた。この日の、夜の天気は・・・・大雨、嵐だつてこと。

ザアーッ・・・・

あとそんなにない距離だつてのこ、こんなに降られたら、そりゃガツカリするじゃねーか。俺も心靈スポット結構楽しみにしてたんだぞ！

「しゃーねーな。戻るか？」

「えー」

「今からこいつてのかよー!?」

「だつてさあ、初めてじゃん。行きたいー。」

確かに初めてだよな。そりゃわかるぞ。でもこれじゃあな・・・。と心中で思いながら俺はただ黙つてた。不意に足元を踏んでみると、微かにぐにゃとした感覚があつた。

「おー、なんか地面もヤバくなってきたけどー？」

「マジイ！？」

「ああ、思い出したけどこいつて崖の上並みにもろかつたつけ。もしかしたら崩れるかも・・・」

途端に眞の顔が青ざめっこのがわかつた。

「ホントヤバいじゃん！いや、マジでーーー標高高いじゃんよーーーー！」

思わず叫んじやつた。その時、足を賢明のまつに踏み込んだからその振動で、なんぢゅうの・・・とにかく地面が崩れた。

ガシャッ！
大きな音。

「ギヤ～！～！」

「ワア～！～！」

それよりも大きな音と言えば、聖奈と美和の叫び声だった。地面は真つ二つに割れて、引き裂かれてしまった。

「節！？」

「ちよつと、どうなつてんだよー？」

そう言つてる間もなく、目の前が真つ暗になつた。

なんか・・・ヤバくね？

・・・

「—— つちやん、起きている……？」

「ん……? なんだ、この声。

「節ちゃん、しつかりしてよー。」

ああ、この呼び方は……。

意識がしつかりしてきて、田の前のものが見えるようになった。
そして、俺のすぐ目の前にいたのは……。

「あつ、節ちゃん……よかつた、生きてた……。」

聖奈だった。

「聖奈……。」

「ううえ……こじりだよ。」「洞窟みたいだよ。私も気が付いたらこじりこった。」「洞窟?あれ、美和と賢明は!?」

「ううえ……こじりだよ。」

「洞窟みたいだよ。私も気が付いたらこじりこった。」「洞窟?あれ、美和と賢明は!?」

聖奈は立ち上がりつて洞窟の外を覗いた。

「あの土砂崩れで別れちゃった。無事かな、一人とも・・・・・」

なんだろう、この感じ。いつもの聖奈じゃない。瞳自体が違うし、声も暗いじゃねえか。

「・・・・・」

思わずバリバリ頭を搔いた。居心地悪いじゃねーかよ、どうにかしてくれー。

「見てよ、まだ天氣治まってない。」「だな。」

俺も外を覗いた。なるほど、こんな大荒れの天氣も偶にしか見ないな。

不意に、聖奈が俺に振り向いた。

「節ちゃん・・・」「あん?」「ねえ、ちょっと。」「

ギュッと俺のリストバンドを掴んでくる。

「なんだようつせーな・・・・・。」

聖奈の顔を見た瞬間、息が詰まつた。目に涙を溜めて、小刻みに

震えていたわけだ。

「なつ、何泣いてんだよ。『らしくねーじやん』」

「どうしょ・・・節ちやん。」

「ハア？」

今度はリストバンド「ひじやねえ。俺の両腕を掴んできやがった。

「一人死なせたらどうしよう…私の責任だよお・・・・・・！」
わあああ！――！」

聖奈は泣きじやくり始めた。いつなつちや、止められねえのはわかつてゐる。

「チツ、どうしてテーマの責任になるんだよ？」

「だって、天氣荒れてきたのに無理にいこつて言つたの私だよ？ひつく。それで・・・こんなことになつちやつて・・・私が一人を殺したんだア！――！」

「まだ死んだつて確実じやねえし！勝手にダチ殺すな！」

俺はつい荒々しく言つてしまつた。聖奈つてこんなに自分責める奴だったんだな。今更気づいたまつた。

「それも・・・そうだね。」

ま、そのおかげもあってか聖奈は泣くのを止めた。泣き虫。聖奈の性格がまた一つ増えた気がした。

「でもか、これからどうする？・節約や。」

洞窟の中であつた階で背中合わはれてして、俺と聖奈がそれぞれ服の水を絞っていた時だ。

「天氣治さんの待つしかねーだろ。」「だけ、せつぱー人心配じやん？」「この天氣で外で歩こいつのかよー？」「・・・」「めん。」

「今、暇つぶしする物なんもつてなし・・・ヒマだね。」

「ホント、ヒマ。」

「そのまま一人で無言なまま畳の音を聞くわけにもいかによな……。
いや、俺が嫌だ。」

その時、また聖奈が話しかけてきた。

「ねえ、今つたばっかの頃、覚えてる?」

「そんなもんいちいち覚えてられつかよ。」

俺のペシャツとした言葉にも動じずそのまま話し続けた。

「節ちゃん、工業系のこと向いてんのに普通科の高校入ったじゃん。何でつて訊いたら”馬鹿だから”って答えたの。」

「ふうん。」

そんなこと言つたかも。

「馬鹿だからって具体的にどんなことなの?」この高校、工業高校よりずっとランク上じやなかつた?」

「まあ、そりなんだけどさ。」

俺は仕方なく話すことにしてした。

「俺も、中学の頃は工業に入るつてゼッテーに決めてたんだ。技術の授業は一番好きだつたし、実力もそれなりにあつたからさ。」「うんうん。」

お互いの会話は、不思議な感じがあつた。

「でも、親が反対してきたんだ。将来には普通科のほうが絶対いいつても。自分のランクに合つた高校にしろつて何度も何度も。」

「え、なんで…？」

「知らねえよ。でも、今まで俺に何も言わなかつた親だつたんだよ。自分のことは自分で責任取れ、ただ他人にだけ迷惑はかけるなつて。このときだけ、つるやく言つてきた。よっぽどのことだつて思つて俺は言つとおりに受験しちまつた。」

聖奈が押し黙つてゐる氣がする。

「馬鹿だよな、俺。そういうときこそ自分で決めるべきなのに。そうしたら、毎日がきつと楽しかつたかもしれねえ。」

「今の毎日、楽しくないの？」

「なつ、なんでそつなるんだよ…? 違つて。今は後悔してねえよ。工業に行けば、こんなに女の口もいなかつたし、何より賢明と美和と、そして聖奈の様なやつに巡り会えなかつたからさ。」

「やつか。」

聖奈の声質が明るくなつた。そして、不意に岩の陰からぬつと顔を出してくる。

「なんだ。そんな、節ちゃん馬鹿じやないじやん。そつ思えるんだからさ。私もねつ、今思つたよ。高校つて巡り会いなんだなつて。実は、この高校、ランクより上だつたんだ。」

「え？」

「どんなテストうけても、判定はCかB。ギリギリ受かる可能性があるつて感じだつたの。でも・・・受かつちやつた そんで、美和と賢明と節ちゃんに会えた！」

満面な笑顔だつた。天氣を覆すよつた、この時期に咲く、向日葵のよつな・・・

俺ももう一回笑いした。

「お、嵐止んだみたいだぞ。」

「マジー!?」

洞窟の外から差し込む光に、俺と聖奈は顔を見合せた。

「いやほや、あの時は凄かつたねえ・・・。
「オジサン染みた物言い・・・。」

ここは俺たちの秘密基地。なんと、あの後一人と会流して無事に戻つてこれたつてわけだ!!

「皆、風邪ひいてないのがスゴイ。」「ほにゃりは風邪ひかないんだな。」

「言えてる。」

「俺、バカじやないんだけど・・・」

「別にバカつて言つてないしー?」

日常のお喋りだ。なんか、いつもややかな幸せってやつなのかな。

でも、やつぱり・・・

あの砂浜でのことはこいつ思い出になつたかな。

第5話 青葉・砂浜・恋心？（後書き）

次回もよろしくお願ひします

第6話 鈍感なのは貴方だよ

。。。。。。バシッ

「うん~・・・」

田覚まし時計が鳴り、乱暴にぶつ叩いた聖奈は、時計に付属している日付に注目した。

「8月・・・23日・・・」

朦朧としている意識の中で、聖奈はポケポケしながら考えた。

「23日・・・一学期は25日・・・ってえ!?!?」

思わずガバッと起き上がった。

「あと・・・2日しかない感じ!?!ヤバい!?!」

ベットから抜け出し、すぐに着替える。

「宿題終わってない!?!」

机に向かうと思えば、聖奈は部屋を出で兄の部屋に駆かざす入つていった。

「兄ちゃんーおこつ遙真ーー。」

遙真是まだ熟睡していたらしく、聖奈の声に反応し、邪魔そりで背中を向けた。

「うるわー・・・もう少し寝かせてくれ。今日は部活も会議もないんだよ。」

「いいから起きとよー！大変なんだーーーー！」

遙しが早いが枕を兄の脇腹に叩きつけた聖奈。

「ん、・・・やめなれ。怒るわ。」

「ホント緊急事態なのーーー。」

「何があった。」

遙真是やつと聖奈のまつを向いた。

「夏休みあと今日入れて2日なのーー。」

「うん。」

「宿題終わってないわけーーー。」

「だからー。」

「手伝つてよ。」

怪訝そうにして遙真是体を起した。

「何故。」

「兄ちゃん教員でしょ。高校の問題なんてへのカツパだよね？」

当たり前のように言つ聖奈に逞真は嘲笑した。

「兄を呼び捨てした上に人にものを頼むときの礼儀も知らぬとは・・・君の愚かさには心から褒めてあげたいね。」

「あ～つもう！～わかりました、お願ひできませんかツ！～？」

「まったく仕方がないな。可哀想な妹のために助けてやつてもいいが。」

「あー ムカつくムカつくムカつく・・・」

「無駄口叩いてないで、宿題を持つてきなさい。ただし、数学だけだぞ。文学的な教科・・・特に英語！もう論外だからな。」

「勿の論だつて」

兄が文系の教科が大の苦手なことは既に知っていたため、ニヤニヤしながら部屋を出た。逆に考えると自分の苦手な理数系の教科が得意。有利だ、と考えたのだ。

逞真は重い溜息を吐いて自分のTシャツを脱ぎ、私服に着替えた。

「んじや、数学と理科は全部任せたからつ！あ、難しそうなところは

間違つといて。怪しまれる。」

「おい、理科までやるとは言つていないぞ。」

「どうせできるんだしいいじゃん。いつちだつて2日でできるやつ

努力します?」

「ああ、そつ。」

みたいな感じでほほ宿題を兄に押し付けた聖奈は、無事に宿題を制覇したのだつた。

一学期の初日・・・

「おはよっー！」

「はよー・・・・」

「節がいる・・・つてことは初日から遅刻！？」

「なんだよ、俺が遅刻マンだとでもいいたいのかよ？」

「ホントのことじやんか。」

「節ちゃんも美和も話し込んでないでさつと歩いてー。」

「お、今日の聖奈は一段とシックカリしてゐるじゃん・・・」

「なんかへんなもん食つた?」

「べつにこい」

ランラン氣分で教室に入ると、当たり前のよつて賢明は既にいた。

「賢明今日も早いね～ツ！」

「お前らが遅すぎなんだよ。」

「ホント、いい子ちゃんつ。」

「ほつとけ。」

学校での日常的会話が今始ました。

「は～い、宿題の提出、出した人は返しま～す・・・」

担任の台詞とともに宿題が返された。

「打田一、本石一、今野一・・・」

節が聖奈に耳打ちする。

「岡沢のやつ、ヤクザの割に採点速いよな。」

「ホントね。トキメーに見てたのかと思えども、わたくしはー。わ
っぺ因縁とは運びやなんだね、いん。」

「津田！駿河！」

—イヅ—

同時に呼ばれ、同時に返事し、クラスで笑いが巻き起こつた。

「津田、また空欄か。お前も少しば駿河を見習え！」

宿題を全てやり、理数に至りてはほぼ正解ということをな。

ろうな?」

「ウソじやないもん！先生、聖奈も凄いですよねー？」

節は聖奈の宿題を見た。

「マジか・・・」

「たまには」なんといふも見せる駿河を褒めてやりたいといふが・・

聖奈が誇らしげな顔をした瞬間、悲劇的な言葉を担任・岡沢からにされた。

「今までの成績からしてこれは有り得ん！ 一体誰を使った！？久
田か！？」

久田とは賢明の名字である。

「いや、俺は一切関係ないんですけど。」

「やつですって！いやー、参考書メツチャ見て時間かけてやつたんですよ。」

「ならこの字はなんだ？」の美しさかつ綺麗な字。まるで学校の教員かなんかだと思わせるこの字は駿河とは懸け離れているだろうが……！」

それらの言葉が矢のように顔面に突き刺さり、聖奈はギクッとなつた。

(ヤバい・・・兄ちやんと私の字つてホント別。どう誤魔化そつ・・・)

「夜中やつひたんで、寝ぼけながら書いたらそうなりました（笑）」「ハツ、本当なんだろ？なあ？」

「ハイ？」

岡沢は流石に折れた。時間もないためさつと宿題を返したのだった。

「聖奈、ホントにアンタがやつたの？？」
「やだなあ、美和。」

ひそひそと小声で言い始める。

「勿論、うちの兄貴よ、兄貴つ。」

「そうかと思つたよ・・・。先生に気づかれなかつただけでまだ良かつたじやん。」
「ウフ。」

ハッピーな顔をしてイスに掛けると、じと目で節に睨まれるのだった。

そんなことのあった数日後のこと・・・

ガラフ

「入つていい?」

節が生徒会室のドアを開けた。

「あ、津田じやん。なんか用？」

「ただヒマだから遊びに来ただけだけだ。」

「や、そつなんだ・・・・・」

奥のほりを見て節は一ツと笑った。

「関口せーん。元氣？」

「あ、節先輩・・・・・」

節が”関口”とよんだその彼女は生徒会所属の一年生。この頃遊びに来るため、知りあうようになったのだ。

「はい。おかげさまです。」

「俺なんもしてねえけどな。」

考えてみてのとおり真面目な優等生である。

「それよりさ、休み明けテストどうだった？どうせ関口せんはいいんでしょ？」

「そんな、いいくて程じゃないんですけど。」

「見せてよ。」

「は、はい・・・・・」

遠慮がちに評価用紙を節に見せる。

「うわ、流石関口さん。頭いい。ほとんど90点以上といつー。」

「ありがとうござります・・・・・。」

「つかのクラスにさ、すんげえ馬鹿な奴がいてや。平均点何点まだったかな・・・・・42だつけて、あ、45だ！」

「つづれーだなつー48ですフーー！」

不意にニアのと「ひで」がした。それはムツと怒った聖奈だった。

「かわんねーじゃねえかよー！」

「変わるしーその何点かさでテンション変わるんですつ。それに今回は一つも赤点とんなかつたんだよーー？」

「・・・ね。関口さんとは比べ物になんないしょ。」

「や、そんな」と・・・

「生徒会の人と比べないでよーかうむー、節ちゃんはどうだつたんだいーー？」

「俺は敢えてノーフメントで。」

「あー、赤点取つたんだ！ そうでしょーー！」

「つるせーーーテメヒも調子のつてんじやねーぞー！」

「図星だーー！」

そのやり取りに、ただ作り笑いしかできない彼女は、聖奈に話し掛けた。

「貴方は何の要件ですか？」

「あ、ビデオデータ貸してほしつつ放送部が。私、パシリ役にされちゃつたよー！」

「ザマーーー！」

「うわ。こんな人と仲良くなつちや駄目だよ、関口ちゃん。」

「は、はあ・・・」

「俺の関口さんになにへんなこと吹き込ませてんだよー！」

「ジョーダンじゅんよつ。」

ビデオデータの入つたUSBを渡され、聖奈は帰つていった。

「節先輩、今の人は・・・？」

「ああ。今のが俺の言つた馬鹿な奴だよ。駿河聖奈つツーんだ。」「駿河・・・聖奈さん。」

彼女の心にはかなりの嫉妬心が生まれていた。

その次の日の昼休み、聖奈の所に例の女の子が来た。

「こんにちは、聖奈先輩。」

「アレ? 関口ちゃんじやん! なに?」

「ちょっと来てくれませんか?」

「ん、いいけど。」

聖奈は人気のない廊下に呼び出された。

「私、せきぐわねの関口礼乃といいます。」

「あ、じゃあ次から礼乃ちゃんって呼ぶわ!」

「はい。ありがとうございます。・・・節先輩のことでの一つ質問が。

「え、節ちゃん?」

「ええ。不躾な質問なんですけど……」「

「いいよいよ。言つてみ!」

「……お一人は付き合つてるんですか?」

「…………へイ??」

「『めんなさい。変なこと訊いて。昨日、あまりに仲よくして、ちつしやつたものですから。』

「付き合つてない付き合つてない!…全然論外!節ちゃんが友達以上の関係だつて考えられないし!」

「そうですか。よかつた。」

最後の言葉を自分に言い聞かせるかのよつて胸を撫で下ろした。

「え、よつかつたの?」

「あの……私、節先輩を好きになつてもいいですか?」

聖奈は思わず口をパクパクさせた。

「そ……それはそれは。びつびつ……。」

「本当に、いいんですか?」

「あの~……逆になんで私に訊くんですか??」

どうしても敬語になつてしまつ。

「本当に、仲よさそうだったので、付き合ついたら悪いなと思つたんです……。」

「そ、そなんだ。でも、節ちゃんみたいな人のどこがいい訳?」「優しい方なんです、とても。私に凄く構つてくださつて、安心するんです。」

(や、優しいかあ?)

「笑った時、こっちも穏やかな気持ちになります。」

（あ、それはあるかも。）

しかし、節を心から好きになる人なんて初めて見た。“顔はいいけど、コワそう”だとか”厄介な人間関係になりそう”とか思っている人が多いのだ。

「礼乃ちゃん、節ちゃんが怖くないの？」

「最初は怯えていました。でも、話していくにつれて……本当の先輩の性格がわかつて、いい人だなって恋に堕ちてしまったんです……。」

「あら、カワイイ話。」

礼乃是切なそうに笑った。

「本当に良かつたです。だから……聖奈先輩も応援してくださいね。」

「お、おうよー！」

礼乃是一礼して階段を下りていった。

聖奈は溜息を漏らす。

（ああ……大人しそうで……あんなに真っ直ぐな子、初めて見た……。）

トボトボと教室に戻ると、美和が小首をかしげていた。

「何だつたの？あれ、生徒会の子でしょ。」

「うん。それが・・・節ちゃんを好きになつてもいいかつて訊かれた。」

「なんで聖奈に訊くの！』

「ね！なんか・・・カレカノつぽかつたらしいよ。・・・そう見える！？」

「ん〜・・・やり取りはそれなりに。』

「ええ！？」

「だつて似た者同士じやんか。』

「ん〜・・・』

聖奈は美和の隣に腰かけて、天井を見た。

「なんかさ、思うんだよね。もし礼乃ちゃんが節ちゃんに告つたとする。ヘンに義理堅いとこあるじやん、アイツって。』

「うん、確かに。』

「だから恋人とか大切にするよね、きっと。』

「だろうね。』

「そうなつたらさあ、3人グループになつて・・・物足んなくならない？』

「だね。でも・・・ホントにそんな田が来るかもしれないね。』

「え・・・？』

美和は真顔だった。

「3人どこのか2人とか・・・もしかしたら最終的に孤立しちゃうかもよ？」

「じょ、「冗談やめてよつーー！」

「真に受けないでよ。・・・直接節に訊いてみたら？」

「うん。チャンスが来たらそうしてみる。』

帰り道、4人で帰つてゐるが、聖奈の家が近づくにつれて皆自分が家のほうへ別れていき、一番最後はいつも節と聖奈の二人になるのだ。

これはチャンスだと思つた聖奈は節に話題を振つた。

「ねえ節ちゃん。」「あん？」「礼乃ちゃんいるじやん。」「関口さん？」「やつ。どう思ひつ。」

自転車に乗りながら、節は不自然に頭を搔いた。

「どう思ひつて……つてかなんで答える必要あるんだよー？」
「いいから。」「なんだよそれ……。——可愛いんじやね？」

聖奈は思わず驚愕してしまい、節に振り向いた。

「あつ、かつ可愛いよねーうん。」

「聖奈と真逆だしや。」

「どうゆ一意味よつ！」

「ハハツ。でもなんで関口さんなんだよ。」

「だつて・・・最近よく生徒会室行くから。もしかしてホレハヤつた？？」

「バーカ。俺に好きな奴なんていねーし。ま、お前は別だけどな。」「え」

思わず息詰まってしまった。

「えつてなんだよ。なんかツツコめよー俺がサリーだひーっ。」「え、あ。『メン。』

「まさか真に受けた感じ？バカじやね？」「真に受けないもん！ただ考え方してたのつーこの話題忘れてつー！」

「へーへーツー！」

そのとき一度のタイミングで分かれ道となつた。

「あ、じゃあね、節けやん。」

「ああ。また明日なー。」

節と別れた後、聖奈はずつとさつきの言葉が氣がかりだった。

『——可愛いんじやね？』

(確かに可愛いよ、礼乃ちゃん。でも、ホントはどういう意味だつたんだろ。好きな奴いねーしどかいつといてただ冗談っぽく言つて

ただけかも。つてがなんでこんな気になるんだ？別に3人になつても少し寂しくなるだけなのに。）

考えてるうちに、見慣れた車に遭遇した。

「あ、兄ちゃんの車だ。」

学校から帰るとこだつたらしに、ちいさな止めてくれた。

「今日は早いな。おかげり、聖奈。」「ただいま～。のつけてくれんのつ？？」「乗る前提な言い方。まあ、あと一キロ半はあるしな。乗れよ。」「ラッキー！」

聖奈は逞真の車に乗つた。

揺られながら、聖奈はふと逞真に訊いた。

「ね、もし兄ちゃんのスッゴイ親しい友達がいるとして。「心理テストか何かか？」
「そんなどころ。で、その人が好きな人が登場したらどうする？あと、そのあと付き合つたりしたら。」

逞真は数秒ほどの短い間に考え、言葉を発した。

「好きな人ができる程度なら、何も考えない。誰が誰を好きになろうと勝手だから。」「うん。」「もし付き合つたとしたら・・・素直に喜びたいかな。実践できるかはそのとき次第だが。」

「そつかあ。」「

「でも・・・・・」

言葉を付け加える逞真。

「その友人が異性なら、話は別かもしれない。」「

「え、何で?」「

「それは、聖奈自身が考えてみなさい。」

聖奈は頬を膨らまして、背もたれに横たわった。

「なんでだよ・・・・」

「お前、学校で何かあつたのか?」

「別になんもないよ! そう見える?」「

「ああ。まるつきり悩んでいる様子だ。それに、この状況で今のようなこと訊かれたら大抵はそう思つだろ? よ。」「

「そ・・・・・マジになんもないから。いやホント。」「

「今日は早く寝れば。なんにせよ、それがいい。」「

「うん。そうさせてもらう。」「

その言葉とともに、車がアパートの前に止まつた。

次の日の放課後、節はまた生徒会室に遊びに来ていた。

「でさ、「うちの担任が超ヤンキー」だわ。」「

「あ、確かに岡沢先生ってそんなイメージありますー」「でしょ? 影でのあだ名は岡沢組長・・・・・」

礼乃はフフッと上品に笑つた。

「ねえ、急に話題変えるけど、関口さんって告られたことないの?

「あ、ありませんよ!...」

「ウソ、絶対にあるでしょ。顔可愛いし!」

「そ、そんな・・・全然です!..」

「じゃあ、自分がホレられてるなって思ったことね?」

「あるはずないじゃないですか! こんな私なのに・・・・・」

「ホントにそういうわけ? もつたいたいないなー、鈍感だね、関口さん。

「えつ・・・?」

すると、ドアの向こうで聖奈が通りかかる。

「あ、聖奈聖奈!...」

節はすぐには生徒会室を出てしまった。礼乃は少しだけ切ない顔をした。

(また・・・聖奈先輩・・・・)

また、違う日の放課後にも・・・・

「今日は一段と聖奈がアホだつたんだよーー!」

と、聖奈についての会話が始まり、礼乃は心の中で溜息を吐いた。

礼乃は思い切って節に接近するためにお弁当を持っていくことにした。

「あの、節先輩。」

「あ、関口さん!」

「あの・・・その・・・・」

妙に緊張してしまい。言葉が上手く出ない。

不意に

「賢明ー、宿題教えてーー！」

「あ、アタシも」

「またかよ・・・。ま、慣れたからいいけどなつ。」

という3人の声が聞こえた。

「あの・・・これよかつたら食べてくださいーー！」

思い切って差し出したとき、礼乃是啞然としてしまった。節の瞳
が・・・こちらではなく、3人のほうを見ていたのだ。

礼乃是節の想いを察して、俯いた。その場にいるのが辛くて、思
わず逃げ出してしまった。

「で、話つて・・・・あれ？」

節が礼乃のいたところを見るころには、礼乃是この近くにはいなか
つた。

「なんだあ？」

「おい節！お前はいいのかー？」

賢明の声に反応し、節は何もないかのよつに3人のほうへ駆けて
行つた。

「俺も頼むーつー！」

その日の放課後には、節は生徒会室に寄らなかつた。

礼乃が家に帰ろうと歩いていた時、不意に節と聖奈を目撃してしまつた。そちらも帰る途中らしい。声を掛けられたら気まずく感じるだろうと思い、礼乃は距離を置いて歩くことにした。しかし、二人の会話は聞こえる。

「ねえ、どうしたらスイーツ食べても太らないの！？」

「俺がそーゆー体質だから」

「うわ、なにそのイヤミッ。ゼッタイ私より甘いもの食べてるので体細いよね。」

「聖奈だつてかわんねーだろ。」

「皮肉に聞こえる……」

彼が甘いものが好きだと初めて知つた。その時点で礼乃是悟つていた。

(やつぱり、私には遠く及ばない。私と聖奈先輩とで話している話題が違うもの。だから・・・一生貴方とは結ばれないでしょうね。本当に些細なことだつた。貴方にとってはどうにも思わなかつたことかもしれない。だけど、私の心には深く刻まれた。私に話し掛けてくれて、本当に嬉しかつた。節先輩、ありがとうございました。最後に、心の中で伝えたいことがあります。いいですか？)

礼乃是涙を浮かべ、静かに呟いた。

(自分の気持ちに気づいていないのだとすれば、鈍感なのは貴方、

ですよ。)

「え、生徒会室行がなくなつたの？」

「礼乃ちゃんはどうしたー！？」

「お前、ヒテエ奴だぞ！」

秘密基地でキャッチボールしながら、3人に言い放たれた。

「仕方ねえだろ、厭きちまつたんだから！」

「ねえ、節ちゃんつて鈍感？」

「ハ！？」

「礼乃ちゃん、節ちゃんのこと好きだったんだよー！？」

「え、関口さんが俺を・・・？マジ？」

思わず野球ボールを地面に落としてしまった。

「なんこと知らねえよー。もし告られたとしてもフツ ただろうし。」

「えー、付き合わなかつたんだ。」

「だつて、こうして遊べなくなるだろ?」

「単純な奴だなあ。お前、一生彼女できないと思つよ。」

「ほつとけよ!」

節の呆氣ない喋り方に、聖奈は少しホッとしたのであった。

第6話 鈍感なのは貴方だよ（後書き）

聖奈の「」の思いつて普通の友情でなんでしょうかね。
まさか・・・・ねえ？ 何がだよ

次回もよろしくお願ひします

第7話 悲しみの琥珀

節の着けるアクセサリーは日によって変わる。

ある時は十字架、ある時はドクロ・・・そしてある時は宝石だつたり。

ここまでアクセサリーを変えられるってことは、相当持っているということ=金持ち。という風に感じられる。

聖奈も美和も賢明もクラスメイトにどれだけ質問されたかわからぬ。

「ねえ、津田つて金持ちなの？」

と。しかし、本人に訊いたこともなかつたため、答えることができなかつた。ただ、3人はこれだけは知つていた。

”親は、どこか大きな会社の権力を握つていたらしい。”

だから、金は結構持つてもおかしくなかつたが、親友としてもそんな失礼なこと確かめたくはなかつた。

そんな節にも日常生活がある。最も、4人でいる時間が一番多いのだが、家族でいる時間も必ずあるわけだ。

ガチャッと扉を開け、家に入る。無言で帰るのはいつものことだ。

「あ。お帰り節。」

「ん。父さんと母さんは？」

「まだ仕事だつて。あ、会議とかもあるらしくからテキトーになんか食べてつて。」

「ふーん。」

節の言葉に頷いたのは、弟の暎^{てる}だった。現在小学6年生で受験勉強に励んでいる。

「暎くーん、そんなに勉強したら逆にバカになつぞ？そのうち死んじゃつても知らねーから。」

そう言って整った坊ちゃんヘアである暎の髪をくしゃくしゃにした。

「頭やめろつつてんだろ！？人は勉強して死にませんっ。」

「いい子だねー、まるで賢明みてえ。」

「賢明さん一緒にしてくれるんなら、すっげー嬉しいんですけど。」

「うわ、貶したつもりなのに。つまんねえ。」

「逆に、節と一緒にされるほうがよっぽど恥されてるし…。」

「可愛くねー！」

節は興がそがれたように、部屋に入った。

（暎、親に騙されたらいけねえぞ。俺、わかるからな。自分だつて昔暎みたいだつたんだ。そこで親の言われたとおりに勉強してきて今中途半端な生活してる。自分が何やりたいのかもわからんね。暎にはそんな風な人生送つてほしくないんだぞ・・・。）

節は普段思つてることを表に出さないが、それゆえに心の中で深く考へてることがある。こういう人物だからこそ、心を開く相手は少ないのかもしれない。

そんな節の親は、確かにすごい権力者であった。

父親は車の販売を専門とする会社の店長。というのは表書きで、本当はその会社を裏で助け社長に貢献し金を沢山もらうなど大いなる支配者なのである。

一方母親は昔父親と同じ会社で働いていたが、今は社長の秘書やなんかを任せられている。

その双方はかなりと厳しいイメージが強い。節も何度も恐れ、嫌い、反抗している。節が大人に反抗するようになつたのも、大方親のせいだと考えるべきだと思う。しかし、顔だけは節同様美人であった。若くして節を産んでいるため、意外と歳も若いほうである。

「節。貴方また赤点取つたの！？」

母親が在宅するときはこの言葉は毎回のようすに聞くだろう。

「はあ・・・別にてめえには関係ないだろつ！？」

「”てめえ”ってそれが親に向けて言つ言葉？」

「つるせーなつ、いちいちいちいち・・・・・。俺がどうじみうと勝手だろうがよ！俺よりも・・・・」

テーブルに座る弟・暎を指差す。

「暎のほうが何倍も辛いんだよつ！」

「暎を使わないの！？」

「節、俺辛くないし。」

「なつ、せつかく助けてあげたのに礼もなしかよ。」

「別に頼んでないし。」

これが日常といつても過言ではない。節は毎回家が嫌で嫌で・・・なるべく外にいようとするのだ。

そんなんある田・・・・・。

節のアクセサリーがガラツと変わった。

「ん、あれれえ？？」

聖奈は節の首元を見て、にんまり笑う。

「今日はわかつたよー節ちゃんネックレス変えたでしょ。」

「ん、まあな。」

「なんで？なんで？また宝石だけじ、今度はどうしたの？」

「別に・・・なんでもねえよ。」

何故か節はノッてくれず、氣まずい雰囲気が続いた。

「それ・・・琥珀コハクつていうんでしょ？綺麗な石だよね。」

「そうだな。」

「・・・・・」

「・・・・・」

「なんかツツ「んでよつー！」

「・・・・・わり。今日はムリだ・・・。」

「なんで今日に限ってムリなのさ？？」

「・・・・・なんででも。」

「は。」

今日の節はなにかがおかしいことは聖奈も気づいていた。しかし、美和と賢明がやつてくると普段通りに戻ったため、何も気にしなかった。

しかし、毎日節がその琥珀を身に纏い、変えるとじてもそれ以外のアクセサリーだったため、妙に思つた。まるで、琥珀を大切にしているようだつたから。

帰り道、聖奈は不意に訊いてみた。

「節ちゃん、その琥珀ってなんか意味あんの？」
「別に。」
「だつて毎日してんじやん。」
「それだけで決めつけんのかよ。」
「別にそうじやないけど……。」
「だつたら訊くな。」

聖奈はムツとして叫び散らした。

「最近節ちゃんおかしこよつ……琥珀の話になるとこいつもやうじやん……ゼッタイなんかあるでしょ。私はそーおもつたらきかないからねー？」

節はその真つ直ぐな瞳に溜息を吐いた。

「他の誰にもこうなよ。」「他にもこうなよ。」「うふ。」「賢明や美和にも、話せるときがきたら話すから言わないでくれよ。」「わかつたよ。」「…………母親が、死んだんだ。」「…………

聖奈は一瞬頭が真っ白になつた。

「え、死んだ・・・?」

「死んだ。」

「なつ、なんで・・・・・」

「自殺だとよ。」

「じゃ・・・・・・・・・・・・」

聖奈は急に胸が苦しくなつて、言葉が出なくなつた。

「色々苦しんでたらしきぜ。社長が秘書以上のこと頼んで来たり、
ベンなことやらせうとしたり脅迫したりさ。俺になんも教えてくれ
なかつたくせに。」

「・・・じゃあ、それはお母さんの・・・・形見・・・・?」

「形見つちやあそつこつもんになるのかな。」

節は首の琥珀を手に、空を見上げた。

「急だつたんだよ。ホント。帰つてきたら、親父に

『母さんが、今さつき亡くなつたよ・・・』

つていわれてさ。思わず焦つたよ。病院行つて靈安室覗いたら、

確かにそこに、母親がいたんだ。白い布被つて。まるで雪みてえに白くてだけどそれよりも冷たくてさ。

『なんでもつと早く教えてくんなかつたんだよー!?』
『母さんが言つたんだ。節には言つなかつて。』

最初、ナメてんのかつて思つたよ。だけど、それにはわけがあつたらしー。

『節はきっと友達と楽しく遊んでる。そんななかで親が亡くなつたつて知らせが入つたら、どれだけ傷つくんだろうつて。ほら、母さんが手紙を。』

俺はそれを聞いた途端、馬鹿馬鹿しくなつたよ。

”節へ。

今までつねやく言ひて「めんなさいね。節のため節のためつて思つてたけど、今思えばちゃんと子供のそばにいてやれなかつたのにそなこと言つ資格無いなつて思つたの。

お母さんも、節の気持ち気づいてたよ。親の言つことばかり聞いてたら、自分でやりたいこと見つけられなくなるんだよね。だから、反抗して、嘆きのこともとても気にかけて。でも、人生に失敗してほしくなくて、だからつい口つるさくいっちやつたんだだと思います。これからは自分の意志で人生を決めて行つてください。貴方は本当に優しい子だから。そういう子に育つてくれて感謝の気持ちでいっぱいです。お母さんはもう駄目です。だから、やめなさい。

馬鹿馬鹿しくなつたつてのは自分がつてことで、親はきちんと気づいてたのに、何あんな反抗しちまつたんだわつて。もつと、できることがあつたんじやねえかつて。そう思つた。「

節の言葉がどんどん血虚的になつていぐ。

「ホント、馬鹿馬鹿し。俺がマヌケに遊んでたときに母さんは考えられねえくらい辛い思いしてたんだぞ?なのに、俺は自分勝手に色々やつて、親困らせて・・・何やつてんだよって話だよな。」

聖奈は何も言えなかつた。こんな時に声かけたつてなんにもなりやしないつて。その代り、節の腕をとり、ギュッと抱き着いた。

「あんなに毛嫌いしてたはずなのに、今はそんな気持ち全然なくて・・・ただひたすらに悲しくて空しくて仕方ねえんだよ!ーあんな大切な人がもういないんだつて自覚した時、思い出の品は全部やけになつて前に捨てちまつて、この石くらいしかねえんだつて・・・なんだよ。」

琥珀の石を握り締める。

「これ、母さんが俺の誕生日に昔買つてくれたんだよ。全然使わなくて、捨てるのも忘れたくらい奥のほうにあつて、今頃つけ始める。最低な奴だつて思わねえか?」

聖奈は節の腕に顔を埋めたままピクリともしない。

「死にたいつて思つてもさ、死ねなかつたんだよ。受験するつて決めちまつた弟だつているし、なによりお前や賢明や美和がいるよなつて。なんも関係ないのに急に俺が死んだつてなつたら、今の俺よ

りお前、うなショックだらつと黙つて。だから、俺は生れるよ。」

腕にある暖かな体温が微かに震えていた。

「申し訳ねえ。ハツ当たりするつもりなかつたんだよ。『あんな。
「ひつ・・・ひつ・・・ぐす・・・・』」

聖奈はしゃつべつを上げ始めた。

「何泣いてんだよ。お前が泣くようなことじゅうないじゃん。」「
「だつて・・・節ちゃんの考へてることが、凄いわかるよ。家族が
亡くなるなんて、そんなこと私考えられないもん。節ちゃんの吐く
一語一語が悲しくて・・・涙が止まなくなつちやつたよお・・・・
。」

「つたぐ、馬鹿じやね?」

「今は馬鹿でいいもん。グスッ・・・・ただ今は自分に正直になつ
てるだけだし。」

「聖奈・・・・」

節は辺りを見渡し、頭を搔いた。

そして・・・・聖奈の頭に手を載せる。

「ありがとな。」

「うん。・・・・節けやん、もつ死ぬなんて言わないでよ。」

そのままの体勢で呟かれ、節は苦笑した。

「・・・・ああー。」

節は今まで通りに戻った。

首に下げてある琥珀を見ると、聖奈はいつも心がいっぱいになるのであった。

第7話 悲しみの琥珀（後書き）

ああ・・・悲しいですね、節。

それにしても、節に異変起つてゐる気がしません？

今回優しかったし・・・まさか・・・・

次回もよろしくお願ひします

「」の頃美和の様子がおかしい。授業が終わり、休み時間になると

「はあ・・・・・」

と不安そうに携帯を見ていたは閉じ、溜息を吐いているのだ。

それに逸早く気づいたのは賢明で、最初は気に留めなかつたものの、ときが経つにつれてだんだん気になつていつたわけだ。

「よう、美和。なんかあった？」

「あ、賢明！・・・いや、別になんでもないよ。」

その言葉を聞いて、賢明は困ったような顔をした。

「絶対違うだろ。何があつたんだよ。」

「・・・・・」

「俺たちの仲だろ？なんでも相談出来んじゃないのか？」

「・・・・・だよね。」

美和は賢明を信じて、微笑んだ。

「誰にも内緒にしてくれないかな？結構噂になつたらヤバいことだから。」

「勿論。」

「賢明を信じてるから、だから言つからだ。」

「おう。」

決心したように再び美和は唇を開いた。

「姉ちゃんが、行方不明なんだ。」

「行方不明」

「うん。ここ何日もずっとでさあ。一度だけメール入ったんだ。」

そう言つて賢明に自分の携帯をみせる。

美和、沙和の分まで家に貢献しろよ（^o^）／サラバだ！—沙和—

賢明はフウッと小さく溜息を吐いて、顎に指を当てた。

「なんか悩みがあつたような書き方じやねえなあ・・・・。」

「そりなんだよ。でも急にいなくなつたからこれもなんか関わつてんのかなつて思つて、だからさつきから携帯見てたわけ。」

「確かに”沙和の分まで”って書いてあるしな。親と喧嘩でもしたんじやねえの？」

「そりなんだなあ。」

「なんか心当たりとかないの？」

”あ”といつて美和は賢明に耳打ちした。

「あんま大きな声で言えないんだけどさあ・・・」

「なになに。」

「onsoonsoと伝える。

「援助交際!-?」

一気に注目を浴びる一人。美和はブンブン首を振つて賢明の肩をベシッとした。

「バカっ！声デカいってーのっ！！」

「わりわりっ！でも・・・今確かに援交って言つたよな？」

「うん・・・だつて見たんだ、前。姉ちゃんが、男にもらつた金を数えてんの・・・。そのことで問題になつて、もしかしたら家を出る」とになつたのかも・・・」

美和の言葉がだんだん強くなつていつて、ついには泣き出してしまつた。

「なんで・・・!?どつかり間違つちゃつたんだよお・・・！」

「美和・・・落ち着けよ・・・」

賢明は机に顔を伏せる美和の背中を静かにさすつた。

「お前がそんな泣くことないだろ?」

そして美和の前の席に腰かける。

「そりや、姉貴が行方不明になつて心配になるのはわかる。へんな心当たりがあつて考え込むのもさ。でも、それは美和がそんなに悲しむ「ことじゅねえよ。」

美和は思わず顔を上げた。

「それはお前の姉貴のことで、美和の「ことじゅねえんだ。大丈夫、なんとかなるさ。」

賢明の今の言葉が身に染みて、美和は涙ながらに微笑んだ。

「ありがと・・・賢明・・・。」

「いや。」

「あつ、賢明ーこのこと・・・節と聖奈にも言わないでーー親しい関係だとさ、言いづらい」とだつてあるじゅん?」

賢明は美和の気持ちを悟つた。

「わかつたよ。俺も、いち早く解決するよつ手伝える」とは手伝つからさ。」

「よろしく・・・頼むよ。」

その日から、二人は一人だけの話題で話すようになった。勿論、美和の姉・沙和のことであるが、そんなこと他人は知ったことじやない為、まるで節と聖奈を仲間外れにするようにまた付き合つてゐる様子に見えたのだ。

「美和、それでさあ・・・・」

「うん。え、マジでー?」

それを見ていた節と聖奈は別に何も気にしなかつた。仕方なくこちらも一人だけで話しているが。

「別にいいよねえ?」

「んー。帰るときも最終的にペアで別れるし、そこで積もる話題でもあんじやねえ?」

「だよねー。節ちゃんのお母さん亡くなつたときだつてこんな感じだつたし。あ、そういうえば昨日コンビニでさ、新しいプリン発売したんだよおーー。」

「うつそ、そ「ジビ」だよー?」

そしてその昼休みのこと。聖奈はクラスメイトに声を掛けられた。

「ねえ、聖奈。」

「ん、どうかしたあ？？」

「最近さ、どうしたん・・・？」

「・・・なにがあ？」

「4人の仲だよ！最近2、2に分かれてるじゃん！」

「そうだけど・・・そんなに気になること？」

「だって、クラスで結構噂になってるんだよ？美和と久田君が付き合つてるとか、2人ずつでケンカしてるとか・・・。」

聖奈はブンブン首を振った。

「ケンカなんてしてないよっ！..なに、そんな噂になつてんの！？」

「ちょっとね。だっていつも4人でいるでしょ？」

「まあ、そうだけど・・・」

「じゃあ、付き合つてたりとかは？」

「う~ん、多分ないとは思うけど・・・。」

聖奈が賢明を美和の姿を上田で見詰めた時、節がやつてきた。

「よひ、聖奈！ついでじつした？」

「あ、いや別に？？」

クラスメイトが

「Uの一人は？」

と訊いてきたので、聖奈は声を張つて

「絶対違こまかうーー！」

と答えた。

その日の帰り道、聖奈はまるつきつ学校から節と一緒に一人だけで帰った。

「節ちゃん。」

節は自転車、聖奈は歩き。不利だと言い出した聖奈をしようがなから節が乗せてあげている。

「あん？」

「昼休みさあ、私女子と話してたじやん。」

「あー。」

「噂になつてゐるらしいよ。賢明と美和のことで。」

それだけで節は察した。

「らしいな。いきなり一手に分かれちゃ、誰だつてそう思つだろ。」

「流石の節ちゃんもそつ思うかあ～・・・」

「流石のつてビーウー意味だよつ！？」

「ははは。」

「何笑つてんだよ。ヘンな奴だなあ。」

「やっぱ、一人だけじゃあ、物足りない気がするな。」

「そりかあ？」

聖奈は前に美和が言つてたことを思い出した。

『でも・・・ホントにそんな日が来るかもしれないね。3人どころか2人とか・・・もしかしたら最終的に孤立しちゃうかもよ？』

節が礼乃と仲が良かつた時の言葉だ。

「ホントに、付き合つてんのかなあ、あの一人。」

「さーなつ。」

「真面目に考へてよー！」

節の呆氣のなさにその背中をベシッと叩くと、思にも由らない言葉が返ってきた。

「ま、美和と賢明が付き合つてもいいか。だつてそうなつたら、聖奈と付き合えばいいんだもん。」

――え・・・？

節は黙つたままだ。聖奈は自転車を止めようと、精一杯足を地面に引きずった。仕方なく節はブレーキを掛けた。

「なんで急に止めたがんだよ。」

「・・・それ、また下手な冗談?」

「何言つてんだよ。」

「つてことはマジ?」

「マジ。」

「・・・ウソオ・・・?」

「それじゃ、駄目か・・・?」

珍しく、節の言葉に”眞面目”なものが含まれた。顔も見れば深刻だった。

「駄目つて言うか・・・節ちゃんと今以上の関係になんの考えられなくて・・・節ちゃんとは高校生活ですつといのままだと思つてたからや・・・勿論賢明も!!--

「・・・つ。」

節は再びペダルをこじりつとした。

「待つて!待つてつて、節ちゃん!!--」

聖奈の言葉は届かず、自転車はぐいぐい進んでいく。節の心情は風の様な勢いが感じられた。

あつとこつ間に聖奈の家に到着してしまった。

「・・・ありがと。」

セウヒ、節もサドルから降りた。

「え？ なに、寄つてくの？」

「入ひてえんだ。」

「で、でも・・・」

「どうせまだ夕方だろ？ あの兄貴夜になんねーと帰つてこねえって。

」

アパートの駐車場を見て吐き捨てる。聖奈のスクールバッグを引つ張つて、無理矢理家に入った。

聖奈の部屋に入つてからの節の熱情ぶりには、聖奈も驚きのあまり黙り込んだ。

聖奈をベッドに押し倒して、その上に自分が覆い被さつて、まるで悔しがる子供の様な表情で想いを口にし始めたのだ。

「お前・・・気づいてなかつたのかよ。俺、ずっと前からお前のことが好きだつたんだぞ？ 砂浜で洞窟にいた時にこの気持ちに気づき始めて、母さんが亡くなつてお前にそれ伝えた時はもう確信してたんだ。聖奈のことが好きなんだって。大好きだつて。お前と話してた

ら、嫌なことは全部忘れられて、心が安らいで、他の一人とは違う感情抱いちゃったんだ。」

「・・・・・」

「こんな状況初めての聖奈は、ただただ黙るしかなかつた。声を出すことができなかつたのだ。

ガチャ

玄関が開く。逞真だ。

逞真是玄関にある靴を見て、思い切り不機嫌な顔をした。眉根を寄せて

「津田・・・・」

と静かに呟く。思考回路を循環をせると、逞真是不安で不安でいてもたつてもいられなかつた。

自分の荷物を置き、聖奈の部屋の扉による。ドアと壁の隙間を覗くと、二人の姿が見えた。思わず一人の体勢に驚愕したが、声を漏らさないように部屋の中を覗いた。

「・・・賢明と美和が付き合つていようがなかろうが関係ねえんだよ。俺の気持ちは変わんねえ。だから、付き合つてくれ！聖奈、お前の気持ちはどうなんだよ！？なあつー？」

聖奈はガクガク震えていた。涙目で節を見ている。

聖奈も流石に感じだのだ。節が怖い。クラスの皆が言つてゐる」とが今ならわかる気がすると。

妹がこんな状況に遭つてしているのに、逞真は動けなかつた。自分の情けのなさに、冷笑する。

「何か言えよ・・・おい。」

節は聖奈のシャツの襟のボタンを乱暴に外し、顔を近付けた。聖奈はその肩を掴んで悶えようとした。

「フツ、何だお前。初めてなのか？ハハ。」

目が笑つていない。耳元でそつと呴いた。

「まだ何もしてないだなんて・・・真面目だね。まるでお前の兄貴のよつ・・・・・」

その言葉に聖奈はカツとなつて癪癩を起した。

「違う、聖奈は兄ちゃんみたいな真面目じやないっ！――なんでみんなそんなこと言つの？真面目真面目・・・・・兄が例えそうだとしても妹の私にはカンケーないじゃん！！なのに一人一緒にされてさ・・・。兄ちゃんのせいだ、私のやりたいことも制限されてるんだよ

つ？私だつて今どきやりたことだつてあるよ……なの」でさなくて……そのせいで真面目つて言われて！」

(聖奈……お前、こんなこと思つていたのか……?)

その心情には逞真も啞然となつた。心にチクチク何かが刺さつた。

「聖奈、落ち着けつて。」

「ヤダッ！――」

「落ち着けつて言つてんだる――？」

「ツ――」

節は、無理矢理聖奈にキスをして口を封じ込めた。聖奈は頭が真っ白になつて、押し黙つた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

逞真のまゝ、あまりにも衝撃的で今まで立つていたところ、床に崩れ落ちた。体の震えが止まらない。

(今の高校生とこつものは……こんなに激しく、痛々しく魅せつけられるものなのか……!?)

それから、じばりく時間が経っていた。

気まぐれなり始めた時、聖奈が口を開いた。

「帰つて、節ちゃん。」

「聖奈……」

「節ちゃんの気持ちは、よくわかつたよ。でも、自分の気持ちが整理できないんだ。」めん。だから帰つて。帰つてよ。」

最後を少し怒鳴り気味に、聖奈は言つた。節は無言でドアを開ける。

部屋を出ると、リビングには逞真がいた。服は私服に着替えており、コーヒーを片手にパソコンをこじついていたのだ。

(ゲッ……駿河逞真……)

逞真は節に気づき、ゆっくりとこちらを向いては、ギロッヒーと一段と冷酷な瞳で睨んだ。

節はギクシャクしながら

「お邪魔しました。」

とだけ言い、玄関を出でいった。

聖奈は、自分の部屋でベッドに横たわっていた。不意に起き上がり、そこには節の母親の形見である琥珀があった。おそらく、キスをしたときに、勢いで切れてしまったのだろう。

急いで渡しに行ひと部屋を出ると、兄の姿にビックリした。

「うわー、兄ちゃんいたんだ。おかえり。」

「ただいま。今日午前授業だったんだよ。部活動させて残業終わらせたらいつもよつと2時間近く早くなつたといつわけだ。」

「そ、そっか。」

「・・・どうした? 様子がおかしいぞ。」

「う、ううんーちょっと外行つてくるねー!」

それへと家を出る。

「おー、外は雨だぞ。」

やつこいつ頃こなもひ聖奈はいなかつた。

雨の中、辺りを見渡すと、節はいなかつた。途端に涙が出てくる。顔に当たるのは果たして雨なのか涙なのかわからなかつた。

「うう・・・・はあ・・・・」

聖奈は泣き崩れた。雨は、自分の心までも叩きつけってきたのだった。

家に入ると、逞真がタオルを聖奈の頭に置き、クシャクシャと拭き始めた。

「うわっーぐえ・・・・」

「ぐえは余計じゃないのか?お前傘差さないで行つただろ?。ずぶ濡れだ。」

「ううううううう・・・・」

温かい涙まで出てきたが、タオルが拭ってくれていソローラーとなつた。

「もーガキじゃないんだから自分で拭くしーーー」

「なんだ?せつかく手伝おうとしたのに。俺がここまでくるのはアものだぞ。」

「ベツツに頼んでないしー?」

そういう聖奈の表情はいつものように戻っていた。

「日薬、貸すか?」

え、まさか田え腫れてるカンシ????」

「魔と」

「…………」
「…………」
「…………」

卷之三

逞真は敢えてそれにふれないで、目薬を渡した。逞真は微笑んでいるものの、心の中では聖奈に申し訳ない気持ちだった。

(明日になれば、元通り友達として話すことができるよね。)

聖奈はそう思っていた。

しかし、友情関係といつものほれつきやわなものじゃない。途轍もなく難しいものなのだ。

第8話 節の本音（後書き）

節、告りましたねえ・・・・。

なんか、ヒートアップしてねえ？ 節けやんよお・・・（^ ^・・）

とにかく、次回もよろしくお願いします

第9話 離れゆく仲

節が告白した次の日、聖奈は節に琥珀石を渡せないまま、時間が経とつとしていた。

「……ズビ。」

昨日の雨のせいか、物凄く体が怠いのだ。

「うへ・・・お腹重いし、頭痛いし・・・学校休むかな。」

聖奈は携帯を開いて美和にメールした。

「ま、これでよかつたのかも。あの後節ちゃんに会うのちょっとまずいって思つてたし」

なんて、のん気に文字を打つていった。

「ん、おこ今日聖奈は？」

節が、ガランとした聖奈の机を見ていった。

「あー、今日休みだつて。体調悪いらしい。」

「マジかよ・・・・・」

節は心底ガッカリしたように机につづぷつた。

(俺の答え、きけねえじやねーかよ・・・・・)

不意に首のネックレスを触る。

(琥珀だけ、ないんだよな。どうかで落っことしたみてえだけど、聖奈の家に行くまではあつたんだ。おそれく、切れちまたんだよな。あのとき。)

溜息を漏りすと、賢明が普通通りに頭をいじってきた。

「どうしたんだよ、節！まるで失恋したかのよつ」。

「うつせーな賢明ー。それよりお前どうしたんだよつー？」

「どうしたつて？？」

「話題とやらは済んだのか一つ？」

「ああ、なんだ節も気づいてたのかよ。解決したぜ。なあ？」

「おうよー賢明のおかげさんで

「よかつたなー。」

「なんだよその言ご方。」

「別にイ？」

テンショントボトボなまま、一人に振り向く節。

「じゃあ、なんでもなかつたのかよ、お前ら。」

「ただの助け合いだけど？」

「あつや。」

「いつもの節ならホツとしたといひでも、今なら何があつてもテンションは上がんないのであつた。

その放課後、節は心配になつて聖奈の家によることにした。

しかし、昨日のことがあつてか、流石に中に入る勇気はなかつた。しばらくアパートの前でジッとしていると、そこに車が止まつた。黒くて高級車に値するよつた高そうで立派なそれに乗つた者は、逞真であった。

車から降りると、節を睨むよつに近寄つた。

「何か用か？」
「聖奈は大丈夫なんだろうなー…?」
「…何の話だ?」
「今日学校休んだことだよー!」

逞真は少し沈黙して考えた。

「ああ。確かに青白い顔をしていたが・・・学校を休んだのか。それはまずいな。」

「あんた・・・知らなかつたのかよ。」

「まあな。体調を見る前に勤務時刻となつた。」

「チ・・・・・」

節はどうしても逞真のことを許せそうになかつた。直接節に関わつたわけでもないが、昨日の聖奈の話を聞いてから、節の中での逞真の存在が一層悪くなつたのだ。

二人はいつかのように睨み合つた。

ガチャヤ

「・・・本当だ。寝てやがる。」

聖奈の部屋に入ると、そこには人というよりもベットの上に大きな塊があるようだつた。

逞真は聖奈のベッドに腰を落とした。すると、毛布の山が「ンソ・・・と動く。

「聖奈、さつき津田が来ていたぞ。」

「ええ・・・・?」

聖奈は火照つた顔を布団から覗かせた。

「お前をとても心配していた。」

「なんだよお・・・・、インターホン押せば行つたのに。」

「お前、体調は大丈夫か？学校を休んだそうだな。」

そういうと、妹の額に手を当て、次に襟元を触った。

「けほけほつ。」

「・・・・咳もしてゐし熱っぽいな。鼻声だしリンパ管腫れでるし・・・昨日体拭いてなかつただろう。完璧な風邪だな。」

「けつほけほつ！咳出るし熱あるし鼻声なのもそくなんだけど。あ。？」

逞真が小さく首を傾げると、聖奈は額を赤くして声を張り上げた。
「私今日女の子の日なのっ！生理痛でお腹だるくてベッドから出られなくて・・・・」

逞真は一瞬虚を衝かれた顔をしたが、不意に微笑んだ。

「そうか。それは失礼した。」

「ホントさ・・・・」

「・・・・よかつた。」

「はい？なにがあ！？」

「津田とへんなことしてなかつたようだ。」

「へんなことつてなにさ・・・・」

「いや、別に。」

「なにや、氣になるじゃんーへンなことひて?」

遙真は聖奈を田線から外して口を開いた。

「・・・昨日やつてたこと以上のひと、だよ。」

「昨日・・・?」

「ああ。津田となにやらベタベタやつてたなあ。」

聖奈はかあつと顔を赤くした。

「なつ、なんでそれを・・・!?

「悪いが、拝見させてもらつた。不審だつたからな。」

「ばつ・・・バツカじやないのつ!?

勝手に覗き見るなんて趣味が悪いのにも程があるつてーのつ!..」

「それは済まない。お前のプライベートに首を突つ込む心算はなかつたんだよ。」

「勘違ひしないでよね?あれ、節ぢりゃんが勝手にやつてきたことだからつ!私は別にキスしたいなんて思つてなかつたんだつて!..」

「わかつてるよ。だから安心したんだよ。聖奈はそんなヘンなことする奴じやないつて。」

「・・・キス以上のこと、なんてねえ・・・」

「悪い。こんな話教師として持ち出すものではないな。だが、月経だつて聞いたらもしも妊娠していたら・・・なんて思つ懶かな気持ちが吹つ飛んだんだよ。」

「男なのにさ、よくそんなに詳しく知つてるよな。」

遙真是フツと苦笑した。

「これでも4年間教師やつて、中学生の女子の体調見えてるんだ

が。」

「うわー··· 来たよ。」

「···」

「···あのせ、こんな話題になつちやつたから訊くけどね？」

「なんだ」

「兄ちゃんはや、誰かとキスした」とあるわけ?？」

沈黙が少し生まれる。

「···まあ、あるね。」

「へ、へえ！」

「何だよ、その不自然な驚き方は。」

「だつて··· 意外だつたんだもん。」

「そうだらうな。」

「ねえ、いついつ?..?」

「言わなによ。」

「だらうね···。でも多分学生のときか。だつたりそれ···。
かつた? 辛かつた?」

「うん?」

「キスしたとき、またはされたとき···どんな思いだつた? 嬉し

「辛い···といつ感情は無かつた気がするな。」
「そういづもんだよね。うん。」

「聖奈」

聖奈はニカツと笑つたが、田は笑つていなかつた。むしろ、辛くてどうしようもない感じだつた。

「お前、初めてだつたんだろう?」

「うん・・・。しかもそれが今まで友達だつて思つてた男の子。ヤツは私のこと好きだつて言つたよ。知つてるでしょ?それも・・・でも、私は正直わかんないんだ。好きだつて言われたらその気持ちに応えてあげるべきだけど、自分自身が同じ気持ちになれないと思うんだ、今は。だつて、今までワイワイやつてた自然な仲だつたんだよ?はあ・・・・」

「・・・・・・」

「兄ちゃん、私、どうしたらいい・・・?」

聖奈が助けを求めるように声ですがると、逞真は真っ直ぐ聖奈を見詰めた。

「・・・・それは、お前自身が決めることだ。」

「・・・・そう、だね。」

「済まない。俺はそれくらいのことしか言えん。」

「いいよ。それが、一番の答えになつたんだもん。」

「本当?」

「うん。」

逞真はスクッシュと立ち上がつた。

「もう、行つてもいいか?」

「あ、うん。なんかゴメン。」

「いい。」

「ありがとつ。」

「お大事に。」

逞真は微かに微笑んで、ドアノブをひねつた。

聖奈が学校に復帰しても、その微妙な仲は途絶えたままだつた。
気まずくて、今までのようにならないのだ。

美和と賢明が頑張つて一人をくつ付けようと/oro。琥珀石
も渡せていないままだし、聖奈の心は滅茶苦茶であった。

「聖奈。 節が会いたがつてたぞ？」

賢明が聖奈のもとへやつてきた。

「絶対違つてしまふ。逢いたくなつて顔に書いてある。」

「馬鹿だなあ。アイシの性格、お前が一番わかつてんじやん。そ
ゆーの隠すほつじやん？」

「・・・まあ。」

「何があつたか知らねえけど、余計にやつたらどうだ？
「私のほつがそんな勇氣ないよ……あ、そうだ。」

聖奈はポケットから、節の琥珀石を出した。

「これ、節ちゃんのなんだ。渡しここへよ。」

賢明は首を振った。

「お前が渡せよ、聖奈。そのほつが一人ことつてもこい。」

「どういう意味ー？」

「自分で考えるよつー。」

ガシガシと聖奈の頭を撫でた。

「？」

聖奈は混乱した頭で、賢明を見上げた。

一方節のほうには美和が助つ人に行つて いた。

「節ー、なんで聖奈とこの頃亀裂起きてんのさ?」

「俺が知るかよ。あつちが会つてこないんだろー?」

「節、なんかしたの?」

節はムキになる。

「し、してねえよーー!」

「はあ・・・・・図星か。節つて突つ走つちゃうからねえ・・・。」

「ほつとけよ。」

「ほつとくから、聖奈といいつなつちやつたんじやないか。」

「・・・・・そうだけじよ・・・・・」

「メールとかしてみれば?」

「そんな勇気、俺にはねえよ。美和ちょっと聞いといてくれよ。なんで節と会わないの?とかさー。」

「自分ですればいいじゃんか。」

「はあ・・・・・マジかよ・・・・・」

節は舌打ちして、携帯のキーを押した。

なんでそんな余所余所しいんだよ?俺のこと、嫌いか?一せ

その時点で、節は耐え切れなくなつてその文章を消去した。

「駄目だ!俺にはできねえ・・・・・」

節は恋愛小説とかでよく見る、ラブレターを書くのに苦労して何

回も書き直す場面が浮かんだ。

（俺は、恋愛小説の主人公かよ・・・はつ、笑える。）

その絶望的な表情を、ただ美和は見守るしかできなかつた。

「賢明、聖奈どうだつた？」

放課後、一人だけの秘密基地で美和は木の上から賢明に話し掛け
る。

「全然だめだ。節のことになると、心閉ざしちやつてゐてえだ。」

「節もだよー。メールしたらって言つたら、そんな勇気ないって。」

「似た者同士だよなー、あの二人。」

「ホントさ。」

二人は溜息を吐いた。

「難しいねえ、関係をくつつけ直すって。」

第9話 離れゆく仲（後書き）

節と聖奈の仲があああーー！ー！

ビバさんでしょ、これから。。。

次回もヨロシクです

第10話 友情の刹那（前書き）

暁 閩哉あかつきとくや：20歳 逞真の住んでいるアパートの住人。教育大学の2年生で夢は中学の国語の教師。逞真のことを駿河先輩と呼んでおり、聖奈は気の合う友達である。懐っこく、若々しい好青年。

寿 誠之助じゅせいのじょすけ：52歳 通称・ジョーさん。アパートの住人兼管理人。ノリのいいキャラでよく逞真をいじりたがる。時に頼れるおじさんパワーを發揮。住人を我が子のように思っている。

柊 秋乃ひいらぎあきの：26歳 逞真の住んでいるアパートの住人。自称プロ少女漫画家。しかしひんねーみ、漫画の題名ともに不明。突然現れ、そして音もなく帰っていく。逞真と同じ年で、彼からは秋乃ちゃんと呼ばれている。

西 孤太郎にじいたろう：30歳 逞真の住んでいるアパートの住人。通称・ニッキー。キツネ顔で嘘が得意。そのせいで妻と離婚した。一人息子を養っている。（息子・智史君）逞真のことは人生に成功した男と（勝手に）認め、羨ましがっている。

そう、逞真の住むアパートの住人は全て苗字が一文字なのである！
逞真だけえ・・・（Ｔ－Ｔ）www

この話で初登場です ではでは、じゅつくづく覗ください！

「おはよー、聖奈！」
「おはーーー美和」

聖奈のテンションは元通りに戻っていた。

「今日宿題ないよねえ？」
「んー、多分。」
「え、なにそれ。」
「だいじょぶ、だいじょぶ！ あつたとしても、賢明がいるでしょ、あたしらには。」
「あつ、そーだよねーーー！」

そう、他愛もない話をしながら、曲がり角を曲がると、途端に聖奈は美和の腕を掴んで逆方向へと駆け出した。

「へつ？せ、聖奈どうしたっ！？」

「いいから、黙つてついてくるのぉ～……」

50 三ヶ月遠ざかると、聖奈は、息を切らしながら止まった。

「お、驚いたあ～・・・」

「驚いたのはこっちだつてーこきなりどつしたんだよ？」

「・・・節ちゃんがいた。」

「・・・・・・・・・・・・は」

「”は”だよね、ホントーマジで「メンヘ（^—^・・）」

「いや・・・いんだけじさあ、まだ氣にしてんだ。」

「急には戻んじゃないよ。」

「何があつたんサ、君ら。まさか・・・・告白の？」

「アソタ・・・わかりやす・・・・。」

聖奈は”ヘタこいたあ～”と地面にへたり込んだ。

「告白、かあ。節がしたの？」

「・・・・・・」

「いいじやん。好きだつて言われたんでしょ？」「

「ん・・・・・」

「節じや駄目？ほかに好きな人がいんの？」

「そんなんじやないよ。ただ、友達だったから、理解不能なだけ！」

「そういうもんかねえ。」

「美和は、なんか思わないの？私と節ちゃんが付き合つたら、美和と賢明、一人だけになるんだよ？」

「平気だよ。それが一人の願いだつたら。どつせ高校卒業したら離れるんだし、うちら。」

「そ、そんな」と言つたら、付き合いつとかの話も水の泡になつちや

うじやん。」

「違うよ。それは自分で思い出になる。」この人と付き合ったの、いい思い出だつたなあとか思うんじゃない?ま、そうなつたら、4人で友達だつた時もいい思い出だつたなあつて思うかもしないけど。」

聖奈は押し黙る。

「ポジティブに考えれば、これもいい思い出になるかも。」

聖奈は乾いた空を見上げた。秋に近づくその空を見ていると、それでさえ切なくなつてしまつた。

授業が終わり、帰る時間となつた。この時間が、聖奈の返まざへなる時間帯だ。

急いで教室を出ないと節とでくわしてしまつ。

素早く学校を出て、一人だけで歩くと、たくさんのことが頭に浮かんだ。

(最近、前みたいに遊んでないなー。秘密基地にも行つてないし。コレといつ勉強もしてないし・・・なんだろ私つて。)

ふと足を止めた。

“いいじやん。好きだつて言われたんでしょう、節じや駄田?”

(駄田じやなこよ。もっと遠い関係だったら、OKしたよ、私は。ただ・・・親しくなり過ぎちゃつたみたい。)

聖奈は、節のことが頭に浮かびあがる。

『あー、あんときのアホな女?駿河つてんだ。いい名前だね』

『何笑つてんだよ。ヘンな奴だなあ。』

『俺、短気じやねえしーー。』

『甘いもんの何がわらいの??俺、菓子あれば一生生きりゃれんだけど。神だな、アレ。』

『勝手にダチ殺すなー。』

『あれあれ。カッパのヤロー。俺、凄くハマってるんだよね。』

『死にたいって思つてもさ、死ねなかつたんだよ。受験するつて決めちまつた弟だつているし、なによりお前や賢明や美和がいるよなつて。なんも関係ないのに急に俺が死んだつてなつたら、今の俺よりお前らはショックだらうと思つて。だから、俺は生きるよ。』

(・・・もつ。普段私並みにバカだし単純だし、女の口染みた性格だけど、でも真面目なこと偶に言つて、私を助けてくれたりしたよね。)

急に心臓が脈打つた。

(どうしたんだろう、私。なんでこんな気持ちになるの・・・?)

聖奈は自分の気持ちに気づくのが怖くて、家まで全速力で走った。

バタン！

「はあ・・・はあ・・・・・」

聖奈は勢いよくドアを閉めた。

「なんなんだよお・・・・」

部屋の中を見ると、机の上に、一枚の写真が置いてあった。聖奈はそれを掴み上げると、一気に涙目になつた。

その写真。聖奈にとって思い出深い、秘密基地での4人の写真であつた。最初で最後のデジカメで撮つた写真。彼らは快樂な笑みを浮かべ、誰一人不満な顔はしていなかつた。

「・・・・・」

急に聖奈はそれを見てムシャクシャした気持ちになり、写真を床に叩き付けたのだつた。

パリー・ン

ガラスが割れ、写真にヒビが入る。最初は抵抗があつたが、しばらく黙つていくうちに勢いと精神力に負け、聖奈は暴れ出した。

枕を振り回したり、棚の置物を落としまくつたり、蹴つたり殴つたり・・・・・思えば部屋にあるもののほとんどが4人の思い出の品だつたために余計に聖奈は癪癪気味になつていた。

・・・・・・・・

しばりへし、部屋は滅茶苦茶になつた。足の踏み場もない。

聖奈は先ほどよつも落ち着いたようすで、部屋の隅でしゃがまつて
いた。

(どうして……こんな気持ちになんなきやいけないんだろ……
? ……なの初めてだよお ……)

聖奈は引っ切り無しに出てくる涙を必死に拭つた。

(私つて、素直じゃないよね。自分の気持ちを受け入れることがで
きない。だから自分がホントは何考えてんのか、さっぱりわかんな
い……節ちゃんのことは大好きだよ。でも……恋人になるつ
てなつたらまた違う気がする……。でも迷つてこんなことになる
くらいなら、素直に付き合おやすみえばよかつたのかなあ……?)

聖奈はふと昔話していた会話を思い出した。

まだ高校一年生の時だ。美和がこんなことを言つ出した。

『ねえ、節と聖奈の字をとあ、繋ぎ合わせたら面白こんだよ。』

3人は首を傾げていた。

『節と聖奈を合わせたら、
”刹せつな那”つて言葉になるんだ。』

『せつ・・・な・・・あ、確かに。』
『ハツ、くつだらねー！』
『節ちゃんー！』
『だつてよー、それが何だつてんだよ・・・ハハハWWW』
『そこまで笑うなよ！私がしらけたみたいじゃんか！！』
『そうだぞ、笑い過ぎだ節。』

節はまだ腹を抱えていた。

『でも、刹那って言葉、カッコいいんじゃない？私は好きだな。』

『聖奈……』

『一瞬つて意味なんでしょう？』

『聖奈つて、急に真面目なこと言い出すよな……。』

『ギャップ激しそぎじゃね？』

『ん？？そんなことないよー』

『』

普段通りの会話。今にしては少し懐かしい感じがした。

(あの時は……私がボケて、美和がツツコんで、節ちゃんがバカにして賢明がそれを静めて……樂しかったなあ……。やつぱり今まで通りのほうが、私には合っている気がする。でも、あの時の節ちゃんの顔、本気だつた……。)

聖奈は、顔を膝に埋めた。

(恋愛の小説とか漫画とか多いけど、どうして男女の付き合いって親しくなり過ぎると、今までの関係じゃなくなってしまうになるんだろう……？ずっと友達同士でいられなくなっちゃうんだろう……。本当に”刹那”だ。”友情の刹那”だ……。友情は一瞬にしか過ぎない。どうして？)

考えれば考えるほど空しくなつていいくばかりで、聖奈は悲しかった。

聖奈は辺りが暗くなつても、そのままだつた。

逞真がとつべの間に帰つてきても。

「聖奈、飯だ。来い。」

逞真が扉ごとに声を掛ける。

「・・・・・。」

「・・・・・聖奈? いるんだよな?」

「・・・・・。」

「返事くらこじりよ。入るぞ。」

ガチャ。

「グス・・・・」

「・・・・・」

逞真は啞然とした。聖奈のピンで止めていない前髪はやたらと長くて、何よりそこから覗く瞳こそ今までに見たことのないくらい暗く闇にのまれていた。

(俺の見ていない所で何かあつたのは事実だが、下手に触ると聖奈の纖細な心が割れてしまうのではないだろうか……?)

そう怖く不安に思つてしまつ逞真だが、それを表に出さず、ポーカーフェイスのまま物思いに妹を見詰める。

「はあ。神経図太い奴だと思ったら。」

「なにせつ。別に兄ちゃんにはカシケないことじちゃんつ……」

「それは関係ないことかもしれないが……」

逞真は不意に床にあるトラ猫のぬいぐるみを手に取つた。

「「いやー。」

と突きつけてきたため、聖奈はギョッとした。

「あの~・・・どういう風の吹き回しで??

「クスッ、やつといつもの聖奈じやん。」

トラ猫を氣に入ったかのように微笑して見詰める逞真。

「え・・・・つとお・・・・」

「例の連中も来ているから一緒に食べようかと思つたんだが、その顔じゃ無理そうだ。もし一緒に食べたかったら顔洗つてきなさい。あと、気が向けば部屋もきちんと片づけるんだぞ。」

やつこいつと、逞真は立ち上がり、部屋を出でていった。

「・・・なんなんだあ？？」

聖奈は逞真に差し出されたトラ猫を見た。

（あ・・・確かにちよつと元氣出たかも。でも・・・ビリじてどうう？余計に涙が出てきちゃうよ・・・。）

と、温かいトラ猫を抱き締める。

（あの頃は、まだ、こんな感じじゃなくて、なんの苦労もなく楽しこ田々だつたのに・・・。）

不意に、『いやー』といつた逞真の顔が浮かんだ。

（先生つて、ホント凄いんだな。ビリじていつも単純に子供を元氣にさせてくれるんだらう～）

聖奈はフフツと苦笑した。

（バカヤロオ、私、自分で子供って認めてビリすんだよ・・・。）

「先バーイ！早く食べましょーよーーー！」

威勢のいい若者の声がする。それはリビングのテーブルから。

「つたぐ、お前の家じゃないんだが。」「堅つてえコト言つなよー。その分家賃安くしてんんだしじょ。ホラ、料理上手いの逞ぢやんだけやし。」「ジヨーさんまで・・・俺ん家は食堂か。」

今の逞真の家には先ほど”例の連中”といつていた住人の2人、
曉闘哉と寿誠之助が来ていた。

ピンポン・・・

インター ホンが鳴り、ドアを開ける。

「あ、逞真君。ついで肉じゃが余つぢやつたんだけど食べない? んー?」

「あれH-1-1-1シシ-ジヤん-1」無沙汰だ」とね。

逞真が話す直前にジニアさんがヒラッヒと顔を出してきた。

「ジヨ、ジヨーさん！」とはあれかい？鬪哉君も・・・」

「ーんちわ」

「はあ、他にニッキーみたいな優しい人はいないんですかね。」

逞真は溜息を吐いて肉じゃがの入ったタッパーを受け取る。

「あ、大丈夫大丈夫。僕も子守終えて一息つこうと憩えてたから」
「イジメだ・・・」これはイジメでしょ、絶対。

「あれ？聖奈ちゃんは？」

「・・・今取り込み中です。」

沈黙の中、鬪哉だけニヤけた。

ガチャ

聖奈が部屋から出てきた。一旦枕を向き、フイッシュと洗面台に行ってしまった。髪はきちんと整っている。

「どしたんじや、アレ。」

「失恋ですよ、失恋。」

「なんとー。」

「暁。」

「駿河先輩も気づいてたんでしょう？」

「・・・・・」

「図星か。流石人生に成功した男だ。うん。」

「でも、意外だなあ。あの聖奈ちゃんが。」

米を頬張り、目を伏せる逞真。

「まあ高校生だし、それは恋だつてするでしょ。」

「そして甘酸っぱくてホロ苦い想いもする。」

気が付けば、小テーブルには秋乃が漫画セツト一式持つて座っていた。

「・・・秋乃ちゃん、君、いつの間に居たの?」

「いまさつきよ。ここにいにネタ浮かぶわけね。あ、さつきの言葉いただくわ」

「お、おい。聖奈を参考人物にするつもりか?」

「台詞もうづだけよ。世の中、日常も取り入れなきゃやつてけないもん!」

「ああ・・・そう。」

その時、聖奈がガタンと自分の席に腰かけた。フッ切れたかのような表情でニカッと笑う。

「ちょおつとーおい、逞真!私の分はまだな訳!?!?」

「逞真と呼ぶな、馬鹿野郎。」

「んまッ、教師が子供に馬鹿つていつたあーーー」「やかましい・・・」

逞真はしぶしぶ聖奈の分の食事を温め直す。

住人たちがうんうん頷いた。

(これでこそ聖奈ちゃんだ。うん。)

「おかわりっ！！」

今晚の聖奈の食べる量といつたらハンパなかつた。

「お前・・・太るぞ。」

「ほつとけい！今日はハラ減つたのっ！バンバン食べるんだから～。」

「それがいいぞ、聖奈ちゃん。まだまだ成長期」

「そつスよ！俺だつて力つけてるしー。」

聖奈は鬪哉とジョーさんとハイタッチした。

一ツシーは満足気に微笑み、逞真も安心したように聖奈を見詰めた。

「ん~いいわねえ・・・今の聖奈ちゃんの表情、主人公に使えそうだわッ！」

「やつた

普通通りの駿河家のディナー（？）に戻つて、一気に雰囲気が明るくなつた。

その夜中のこと。

逞真はぐっすりと眠つこんだ聖奈の部屋に入った。部屋はせつまとは比べ物にならないくらい片付いていた。

妹の無邪気な寝顔に微笑んで、深刻な顔をベッドの隣の小さな棚に向ける。そこには電気と本と、携帯が置いてあった。

逞真は携帯を静かに手に取る。そして、物音を立てないように部屋を出た。

携帯をいじり、節の携帯アドレスを見つけ出す。逞真はその発声通信ボタンを押し、耳に傾けた。

もしもし、聖奈！？

案の定節の驚愕した声が返ってきた。

「・・・・の、兄だ。」

一気に節のテンションが下がっていた。

「これ・・・聖奈のだよな・・・ですよね?」

「そうだ。」

「・・・何の用・・・ですか?」

逞真は冷酷な声で言い放つた。

「明日、土曜日の午後4時、北公園に来い。」

「・・・は。」

「必ず来い。わかつたな?」

「え・・・あ・・・はあ・・・。」

曖昧なまま電話を切つた。

その逞真的表情は、無に近く、また、怒りもこもっていた。

第10話 友情の刹那（後書き）

逞真お兄ちゃん、一体何するつもりなんでしょうかねえ……
次回も宜しくお願ひします

土曜日の午後4時前。節は家で悩んでいた。

(行つたほうが・・・いいのか?いや、アイツの血ついと聞くなんて思うつぽになるだけだし、俺のプライドが傷つくなんでも、昨晩の駿河逞真の声は、本気全開だった・・・。)

節は舌打ちして立ち上がった。

(しゃあねえ、行つてやるか!—)

節は家を出てこき、自転車で北公園に向かった。

近所にあるその北公園は、結構大きな公園で、休憩所やバスケットコート、様々なボールなどが備わっていた。

節はどこに行けとも言わぬでいなし為、色んなところをわざよいっていた。

親しみ深いバスケットコートに廻り着くと、
節は思わぬ人影に遭
遇した。

シユツ ポスツ

(駿河・・・・・逞・・・・真・・・・?)

そう、逞真だつた。ジャージという軽装で、バスケットボールをドリブルし、今さつきショートしたのだ。

その動きと言えば、目が釘打ちになるほどである。まるで、どこか優秀なバスケットチームから上がってきたかのよう。節はふと、聖奈が自分の兄は高校時代バスケットボールのエースだつたんだと言つていたのを思い出してしまつた。

「ハツ、また聖奈の！」とを・・・・・

つこ頭が混乱して舌打ちする、それよりも節の口に氣が付く、動きを止めた。

「よくいいまで来る実践力があつたな。絶対来ないかと思えば、」

節はイライラしつつも、反抗する勇気を避けようつと我慢して口を開いた。

「それで……なんの用、ですか？」

不自然な敬語に逞真は嘲笑うかのよつた瞳を見せた。

「タメ口で結構だ。おそらく、その方が君にとって都合がいいのだろ？ そう考えれば、今の私にも。」

（“私”か。流石中学の教師だよな……。完璧クソ真面目で校内の悪い生徒取り締まつてますオーラ出してるよな。さつきのバスケの動きを例外にしたら、体型もそれっぽいし。聖奈も家にいるのに学校にいるみたいだつて言つてたよな。）

また、聖奈のことを考へてしまつたと節は後悔した。

「じゃあ……何の用だよ？」

逞真に対する田つきは変わらない。ゆっくりと近づいてくるその姿に、節はただ瞳を変えず少々ピクついていた。

「これを持って。」「え。」

逞真に渡されたのは先程彼が持つていたボールだった。
節はきょとんとボールに目を移す。

「だから、何がしたいんだよ。」

「それでこの位置からゴールまでビーブ投つても構わないからとにかくショートしや。」

「・・・は？」

「いいから。聖奈と遊んでいた時に飽きたほどバスケをやっていた

のだらうへ。」

「・・・まあ。」

「早く始めてくれ。」

逞真はそう言つて、コートから場所をすれた。腕を組んで、節を見破るよつた表情をする。

「今ジーパンで動きにくこんだけビ・・・・」

セラブッシュブッシュ弦きながらドリブルし始める。

ダンツ ダンツ

その姿を、物思いに見つめる逞真。

節はいつも通りにゴール付近まで走り、片手でショートした。それはきちんとゴールに收まり、地面に叩き付けられた。

(なんの意味があるんだ・・・・?)

そう思いながら、逞真のほうを見る。

「やはりその程度か。」

唐突に冷たい言葉が返ってきた。節は堪忍袋の緒が切れ、今にも取つ掛かりそうな感じで逞真に駆け寄つた。

「どうこいつ意味だよ！？その馬鹿にしたよつた発言やめてくれねえつー？居心地悪いから！！」

「フツ、自己中心的だな。情けない。ただレベルを口にしただけだ

ぞ？」

「アンタが言つたから俺はその通りにやつたんだろー！？」

「だから言つたんだ。やはりその程度かと。」

「・・・っー？」

「約2年間遊んできた割には結構いい動きはしている。だが、所詮は遊びのうちに覚えたこと。本格的な動きには到底なれない。」

「なんだと・・・ー？」

節は逞真の襟を摑んだ。

「悔しいだろー。その感情をすぐ表に露わにするのが君の短所だ。それに、動きに曇りがあったのは考え方や悩みのせいだろー。わかりやすい性格がアダとなつたな。」

虚を衝かれた表情をする。

（まるで教師に説教されてるみてえだ・・・・・。でも、あのシューートだけでこんなに見抜けるなんて・・・・・）

節は逞真の襟を離した。

「なんで、あれだけでそこまでわかるんだよ・・・・・。」

「私は10年近くバスケットボールをやり続けてか、シューートするまでに、その人の感情や性格がでてくると思ってるんだ。だから、先程のようなことをやらせた。」

「ああ・・・そういうことだったのか。」

逞真は頷いた。

「私が話したいことはな、大体目に見えているだろーが、聖奈のこ

とだ。」

「そうだとと思つた。」

「君の悩みも、おそれりへ聖奈の」とだらり。
「・・・・・」

逞真は黙つて歩き出した。

「私は、聖奈に対する君の気持ちを知つてゐるつもりだ。」

「いつ知つたんだよ・・・。」

気にせず、逞真は話し続けた。

「聖奈はな、悩みに悩んでいた。今までの聖奈とはかけ離れた瞳を
私に見せてきたんだ。私も啞然としたよ。」

地面のボールを拾つてケースの中にいれる。

「今君の性格が私のなかでわかつたから聖奈の気持ちがよくわかる
気がする。君もわからないか？」

「・・・・・」

節は黙つた。黙ることしかできなかつた。

そのまゝ、時間は過ぎていき、逞真にも限界が訪れた。

「・・・平静を裝つて話しているが、私は心底怒りに満ちているぞ。
そちらが何か話さない限りいつづチギれるが知れたものじゃない。」

「・・・・・じゃあ、なんて言えば気が済むんだよ、駿河逞真。」

少々ムカついて発した節の言葉に、逞真は眉をピクリと動かし、
振り向いた。

黒い雲が一人の頭上を暗くしていくと、逞真の表情と合って、何とも不気味に見えていた。

聖奈は自分の部屋で、机に寄しかかりながら琥珀石を見つめていた。

「どうしようかなあ……？吹つけられたはいいけど、肝心の節ちゃんとはなにも話せてないし、お母さんの形見いつまでも持つてるわけにはいかないし……。」

不意に携帯を開くと、聖奈は顔を歪ませた。

「ん？なに、この履歴。昨日の夜中じやん。私寝てたはずだけど……。しかも、相手節けやんじやん……！」

聖奈はいつもたつてもいられず、部屋のドアを開けた。

「兄ちゃん、私の携帯いじつた！？」

シーン・・・・

「あれ、いない感じ・・・?」

リビングにも兄の部屋にも彼の存在は無かった。

「あれ、変だなあ。どこいったんだろ。」

首を傾げながら携帯に田田を向けてなおす。

「でも、確かに履歴に残つてんだからそりだよね。・・・・・はあ。」

聖奈の表情が再び曇つた。

(節ちゃん・・・・・、私こんなのは嫌だよ・・・・・。)

琥珀石をギュッと握り締め、聖奈は家を出た。

「氣分転換にはもつてこいだよね、北公園つて。」

聖奈は北公園に来ていた。聖奈の気分転換の場所はいつも北公園の原っぱなのだ。天気が怪しくて人が来なくなつた北公園は聖奈が落ち着くいい場所となつてゐる。

「丁度この天気でよかつた！」

聖奈は天気に似合わないルンルン顔で草の上に寝転がった。

曇り空に琥珀石を透かすと、その上からポツ・・・・・ポツ・・・・・と零が落ちてきた。

「ん・・・? 雨だー・・・・。」

仕方なく起き上ると、バスケットコートのほうで途轍もない音が鳴り響いた。

バシッ・・・・・！

現地から結構遠いはずなのにしつかり響いたということは、尋常

じやない音なのは確かだつた。

聖奈は不審に思つてバスケットポートのほうに向かつた。

逞真はその拳を節の綺麗な頬に向けていた。

「・・・ってえ、な・・・！」

地面に倒れた節の口端からは赤い血が滲み出でている。それは、確かに逞真がつけた傷であった。

男子高校生に向かつて殴つても逞真は顔色一つ変えなかつた。むしろ、教師としてでなく兄としての瞳が節に向けられていたのだ。

「もう一発、殴つても充分だな。」

「何だと！？」

「とうとう俺の堪忍袋の緒が切れたようだ。さつきの一言で。」

彼の額には血管がクツキリと浮かんでいる。

「全く反省ができるいい！お前のような奴を俺は初めて見たぞ。分からず屋で、人の気持ちを全く考えない愚か者を。」

節は悔しくなつて立ち上がつた。

「どうせ俺はこいつだよー。直覺しているわ。だけど、それを『アンタにグツサグサ言わると、無性に腹立つてくんだよーーー』」

今度は節が拳を向けてきた。

「オラッ！ー！」

その不良染みた振り上げを、逞真は慣れたよつて受け止めた。

「えつ」

虚を衝かれたところで節は簡単に叩きつけられてしまった。身動きができない。お互いの服がずぶ濡れになり、髪も乱れ始めた。

「なんで・・・・・」

逞真は無表情で節の体を抑え込んでいる。その姿からは想像できないほどの重さが節には掛けられていた。

「おい、お前。中途半端な気持ちで聖奈に想いを寄せている訳じゃないよな・・・・？」

「中途半端なわけねえだろ！？初めてだつたんだよ、聖奈が。初めてこんなに女子を好きになつたんだ。ハンパな気持ちだつたら、こんな胸痛まないし！・・・・・つあ・・・・・・」

節は思わず自分の言葉に驚愕した。

逞真はフツと鼻で笑いつつ、微笑みかけた。

「素直に言えるじゃないか。・・・なるせば。」

節に掛かる重みが少し減つた。

「だが、今の君にはまだ聖奈を任せないとまだできない。況じてのプライドが許さない。」

「俺も、アンタを受け入れる」ことはあつと無理。でも、聖奈に対する気持ちは変わんねえんだよ。俺は・・・ざつしたらいこんだよつー?」

逞真は何も考えず即答した。

「なりませぬその態度と性格を変えろ。反抗的になるのも一切やめなれー。」

「そうしたら・・・聖奈は俺のこと許してくれるのかよ?」「それは、聖奈自身が決める」とだ。俺がわかることじやない。ただ、その程度のことはできないと聖奈を任せることができないとこうことだ。」

「・・・いい加減、のしかかんの止めてくんねえ?」

「俺の言つてこいる」ことがわかるなり、起き上がつてもいいが?」

節が口を開いてみると、木陰のまづから人が出でてきた。

「うわーー!エックリ・・・誰かと思つた。つてか何やつてんのー?」

聖奈だった。

「聖奈・・・・」「

また一人の息ぴつたりだつた。顔を見合わせ、今にも互いを睨もうとしたところで、聖奈は逞真の肩を押して節を解放させた。

「お前、誰に向かつて……。」

「うひせーつ……節ちゃんイジメたら私がしょーちしないんだからねッ……。」

「聖……。」

節は啞然とした。聖奈は兄のほうの味方になるのかと思えば、逆に自分のことを庇つているのだから。

「別にただ軽い説教してただけだが?」

「さあどーだか。原っぱのほうでもシックカリ殴つた音聞こえましたけどお? ?」

「それは、セ「トイ」とした罰だ。」

「勝手にヒトの携帶いじつた人に言われたくねーッ……。」

聖奈はフンッと兄に背中を向け、節に手を貸した。

「大丈夫? うちの兄貴ちゃん」うつ見えて結構強いからや。口切れでんじやん。」

「あ・・・・いや、別に平氣だけど。」

そう言いながらも聖奈の手を借りる。

「聖奈、俺……。」

「「」ねん、節ちゃん……。」

聖奈の口から出てきたのは謝罪の言葉だった。

「なんでお前が謝んだよ。」

「私、節ちゃんの気も知らないで田口そむけてた。自分にもそむけてた。私だって節ちゃんのこと好きなのに、気付けなかつた……。これ、意地張つて返せなかつた。」

琥珀石を節に差し出す。

「聖奈、俺んこと許してくれるのか?」

「うん。」

節は思わず押し黙つた。嬉しくて、何も言えなかつた。

「じゃあ……む。」

思い切つて声を振り絞つて出す。

「本当に許してくれるんだつたら、その石、聖奈が俺の首に着けてくれ。」

聖奈は迷わずに頷いた。

「……はい。」

節の首に手を回し、初めに着いてたチャームネックレスに琥珀石を着けた。

「ありがとな、聖奈……。」

「節ちゃん、私節ちゃんと付き合つ。今までと違う日々になつてくれもしれないけど、でも友達だったころ忘れないでれば大丈夫だと

思つかひ。」

「ああ。俺も、頑張るから。前みたいに聖奈の」と困らせなこよ
う。」「

「他の人もだよつー。」

「・・・「つさ。」

節は苦笑した。その体を離して、聖奈は逞真のまつを向いた。

「兄ちゃん、これでも節ちゃんの」と許せないわけ?「.

逞真は一人の瞳を見た。

「・・・・いや。」

答えは意外にもあつさつだった。

「そんな姿を魅せられて、許さない奴はいないと思ひ。・・・好きにしなさい。それがお前の幸せなんだな。」

聖奈は思わず言葉に逞真に抱き着いた。

「ありがとー!兄ちゃん大好き?」

「おーおい、抱き着く相手を間違つていなか?」

「んつ??.」

逞真は聖奈をはがすと、その背中を押して、節とくつつけた。ノ
リで一人は抱き合つてしまつ。

「ちょつ、兄ちゃんなにやつてんのー。」

「そのほうがお似合いだぞ。もつ子供じやあるまこしな。」

二人は顔を見合わせて、はにかんだ。

「あの・・・や。」

今度は節が口を開く。

「俺、アンタのことなんて呼べばいいんだよ。流石にフルネームじやまざいから・・・。」「んー・・・・・」

逞真は俯いて考え、馬鹿にするような表情でこいつ言つた。

「兄貴でいいや。節君に”お兄さん”だの言われたら氣色が悪い。

節も負けぬとこいつこいつ。

「そつちこそ、いきなり節君つて氣色悪いんですけど。」

「一応教師だし君付けのほうがいいかななんて思つたが、間違いだつたな。面倒だから節と呼んどくか。」「――ま、いつか。」

この二人が微笑み合つたのはこれが初めてかもしれない。

月曜日・・・・・

「美和オッハー」

「聖奈よお」

世間話をしながら学校に行くと、こつものよひみに賢明がさきに着席していた。

「賢明おはよーー。」

「よひ。」

「あれー、節は？？」

「また遅刻じやねえの？」

「もー仕方ないな節ちりやんは。ま、いつもの」とか

賢明と美和は呆然とした。

「うわ・・・聖奈が節の話題ふれるなんて・・・。」

「もしかして、仲直りしたとか・・・?」

聖奈はいつもの一言一顔で頷いた。

「うん!」ごめーわくお掛けしやした

「そつかそつか。」

「よかっただ!」

「あ、それとー・・・私たち、付き合つんで

それには驚かないわけがない。

「マジで! ? おめでとさん! ! !

「やつぱりかー。ま、しょうがないよね、賢明。」

「だな。」

その時、くしゃみをして節が入つてきた。

「はよ。なあ、今俺の噂してただる?」

美和と賢明がにやけて、一人を見た。

「な、なんだよ。」

「べつに? ? ?

「そうそー。」

聖奈たちは平和な生活に戻った。

今までと違ことがあるかもしないけど、それも高校生活での
楽しみだと聖奈は思うのだった。

第1-1話 プライド（後書き）

仲直りしました！これも逞真のおかげ……？
とにかく

次回も宜しくお願ひります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9922v/>

友情の刹那

2011年11月27日16時55分発行